
遊戯王 - 異世界黙示録 -

ぽいにん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 - 異世界黙示録 -

【Nコード】

N0118L

【作者名】

ぽいにん

【あらすじ】

突然、最近流行りの異世界トリップを体験した平凡な高校生「海^か瀬^{いせ}総^{そう}一^{いち}」。「勇者」と崇められ、「遊戯王」によって世界を再び一つに纏める役目を背負った彼の運命や如何に。

プロローグ

とある物語

竜が、悪魔が、魔獣が、精霊が、世界の調和を成す世界があった。

世界は平和だった。その世界に生きるものも、それは永遠に続くものだと信じていた。

だが、平和を乱し、世界を混沌へと導く、六体の「邪神」が顕れた。

どこから顕れたのかは分からない、その「邪神」たちは世界に闇を、災厄を、恐怖を、死を振り撒いた。

瞬く間に世界は絶望に沈んだ。いかなる者も「邪神」には歯が立たず、その贅として肉体と魂を“喰われた”。それが何百年と続き、世界はもはや死んだかと思われた。

しかし、その世界に一つ、破滅の暗雲を切り開き、一閃の希望の光が差し込んだ。

それは、一人の男だった。男は、どこからともなく現れた。

男は、「邪神」に支配され、闇に堕ちた世界を目の当たりにすると、この世界を救う、と決意し、長く、険しい旅に出た。

男は散り散りになった世界を纏め上げ、数多の魔物を駆り、共に六体の「邪神」と戦い、死闘の果てに全ての「邪神」を封印した。

平和を取り戻し、人々は歓喜した。だが、その中に男はいなかった。いつの間にか、いなくなっていた。

世界の住人は男を「勇者」と讃え、崇めた。平和な世の中で、男は英雄として、人々の記憶にいつまでも残った。

そんな、とある勇者の物語。

これはそれから、20年後のお話……

私立「神無月高校」。通称「カンコー」。巷での知名度と入学者は屈指を誇る高校だった。洗練されたカリキュラム、卒業後の進路の多様性、自由度の高い校風、エトセトラエトセトラ。人によって理由は様々だが、この高校を選ぶ学生は毎年毎年後を絶たない。

あまりに有名で、かつ競争率の高い高校だ。この高校に入学している、それだけでも他校生と比較して、就職や進学では相当なアドバンテージとなるのだから、どんな生徒もその親も躍起になって、何が何でも此処に入学したいし、させたいだろう。

かくいう自分もその一人だった。輝かしい未来を思い描き、大嫌いな勉強も必死にやりまくり、とうとう此処に入学した。

入学してから一年間は、そりゃあ楽しかった。中学時代とは何から何までが違って新鮮だったし、初めての事だらけで胸が躍った。毎朝毎朝、新品の制服に袖を通しただけで眠気なんざブツ飛んでテンションのボルテージは上がりまくってた。上がりすぎて思わず喜びのダンスなるものを舞っていたら、丁度トイレから出てきた母親に白い目で見られたのは秘密だ。

だが今じゃ……

「……………くあ。」

この体たらくだ。活字だからイマイチ分からんよね。うん、ゴメン。

入学してから一年間は椅子の背もたれと平行を保っていた背骨は氣力を失い猫背気味に情けなく丸まり、ひたすらにノートの上を労働基準法を違反するほど走りまくっていたシャーペンは、今じゃただの飾りかペン回しのためのオモチャでしかない。目から念眼殺を放つほどに黒板をガン見していた視線は前の席の名も知らぬヤツの旋毛をボーっと眺めるだけだ。

この変わりよう、思い返してみれば我ながら過去との変わりように驚き苦笑するしかない。まったく、何をどう間違えたらこんなに無氣力シンドロームに陥ったんだろうか。オレが訊きたい。

まあおそらく、アレだ。要するに“飽きた”んだろう。学校生活に中学時代の中盤辺りから引きこもりのロードを歩み出していたオレにとっては、そりゃやっぱり高校は物珍しいもののオンパレードだし、それが楽しさに直結するんだろう。

しかし、だ。どっかで誰かが言っていた気がする。「人間は刺激を

求める生物」だとか何とか。何か物事をやっている時、最初はやっぱり楽しい。だがそれが時間の経過とともに延々とループしたら、その楽しみはどんどん小さくなって、最後には不快に感じたりするらしい。今のオレが、まさにそれだ。

「……くあ。」

再び欠伸を一つ、大口を開けて堂々とブツ放す。生き生きとしていた二年前までなら、欠伸を噛み殺すどころか欠伸すらしていなかったと思う。いやはや、人間の変わりようというか、廃れようは怖いねホント。あ、一応補足しとくと、オレーヶ月前で三年生。

ふと、何かを感じて机の中に忍ばせたケータイを見てみる。調べてみれば、桃色の光を明滅させてメールの受信を静かに主張していた。校則では学校へっケータイの持ち込みは許可されているが、授業中には使ってはいけないらしい。残念ながら、知ったこっちゃないけどね。

だが、校則違反なんて教師にバレた時には大問題だ。今まで真面目で品行方正な学生を演じていたオレがケータイを授業中に使ったなんて露見したら非常にマズい。偽りとはいえオレの名誉に傷が付くし、今後の進路に影響が出るかも知れんし。

一応、チラリと黒板の前に立つ数学教員に目を向ける。教員は未だにミミズがうねってるような筆跡で、呪文のような方程式をひたすらに書き込み、蚊の鳴くような声でその説明を延々と呟いている。

よし、こつちを見てないから大丈夫。しかし、誰も授業を聞いてないだろうに、よくやるねホント。

数学教師の注意が生徒に向けられて無いのを確認すると、オレは静かにケータイを開く。フォルダを確認してみれば、見慣れた名前がメールを寄越していた。

《海瀬^{かいせ}え、今日カラオケ行かねえ？》

隣のクラスのオレの友達だった。オレと同じ引きこもりのクセに、何故かカラオケだけはやたらと行きたがる。音痴なのに。ちなみに“海瀬”とは、オレの名字だ。

カラオケか。少し悩む。確かにカラオケは行きたい。アイツは音痴だけど、テンションが上がると踊り出すから面白い。今は財布も余裕があるし、行きたいのだが。

（今日はVジャンプの発売日だからなあ……。帰りにコンビニで買って今日は家でゆっくり読みたいし……。）

これだけは外せない。毎月の楽しみの一つなのだ。目当ての漫画をじっくり読んで、他のものを軽く読んで、また目当ての漫画をじっくり読む。目当ては勿論「遊戯王」だが。

ちなみに、最近は全国で「遊戯王」が再び大ブームとなっている。老若男女問わずがあちこちでデュエルを繰り広げている。地域によると、授業の一環として採用されている学校もあるとかで。まったく、羨ましい限りだなコンチクショ！。

少し悩んで、メールの返信をする。ケータイを手にした当初は慣れなくて、メチャクチャ遅く文章を打っていた頃がどこか懐かしい。

《スマン、今日無理。》

感情の籠もっていないなかなか淡泊な文章になってしまっているが、これはもう一種のクセだから直しようもない。メールを打ち終わるとほぼ同時に、「送信」のボタンを押す。

「送信中」と表示されると、完了まで確認せずにケータイを閉じる。前に送信が失敗して向こうにメールが届かなくて一悶着があったが、まあそんな時はそんな時だ。

何となく気だるくて、背もたれに背中を預けて、というよりもたれ掛かる。ギシリ、と何だか嫌な音を立てるから学校の椅子は気分が悪くなる。そう簡単に壊れたりしないだろうけど。

と同時に、オレの耳に授業の終了を告げるチャイムが飛び込んできた。

「……メール打たんで良かったかな。」

誰に言うまでもなく、一人小さく呟いた。

場所は変わって、自宅までの帰路をオレは歩いている。いつものように学校からの束縛から解放され、アスファルトで舗装された道路を大股で闊歩していく。

普段なら重くて帰宅に高揚するテンションを下げる要因たる背中の

鞆も、Vジャンプを買った今のオレの前にはさしたる傷害にはなりえない。ふへへ内容が楽しみだ。

「遊戯王」の物語の展開を楽しみにして心踊るオレに、事件は起こった。

突然、オレの足元がダイヤ型に大きく裂けたのだ。大口を開ける裂け目には、何やら紫色の空間が蠢いていた。

ニュートンだかの定めた定理の万有引力によるものか、ブラックホールのように裂け目が吸い込んできているのが原因か分からない。状況を呑み込めないまま、オレは成す術なく裂け目の深奥へと落下した。

「
ウソオオオオツ!？」

ああ、叫んだのは小学生に運動会の応援団をやって以来だったかなあ……、とか、落ちながら呑気に考えられたオレ自身に驚いた。

情けない悲鳴を後に引いて、オレはあつと言つ間に紫色の底へと引き込まれていった。

第2頁 魔法族の里

「 うえあつ!？」

不本意ながらも再び情けない悲鳴を上げ、途中で粗いクッションのような感覚を味わい、オレの体が地面へと叩きつけられた。あ、ちよつと尾てい骨痛めたかも。

尻部の痛みに耐えながらも何とか立ち上がる。よしよし、軽い鈍痛だけで済んでるっぽい。無事で何より。

上を見上げて納得した。見上げれば何とまあ、落下したオレがブチ抜いたであろう大きな穴が、藁葺きの屋根に穿たれていた。うん、屋根の穴からあの変な紫色の裂け目が見えるし……ん、屋根？

まさかと思い、周囲をぐるりと見渡してみる。年季の入った内装に、その雰囲気とマッチした古風な食器棚や椅子など、生活の痕跡と匂いが染み込んでいる。家の骨組みを構成していたであろう、散乱した木材はとりあえず無視。

「……とうとう来おつたな。」

オレのではない、明らかに囁れた声の呟き。再び室内を見渡してみる。

すると、部屋の奥の暗がり隠れて、背筋が曲がり、震える手で杖を突いた婆さんが立っていた。多分、この家主なんだろうな。いや、冷静に分析している場合ではない。

「……あゝ、スマン。天井、つか屋根？に風穴プチ開けたのは謝る。ただまあオレも決して怪しいヤツでは……。」

「「イモータル」めつつっ!!」

「……は？」

おいおい。初対面の人間に対していきなり何を言い出すんだこの婆さんは。コラ、とか、コノワルガキが、とか、もっと他に言うべき事が有るだろう。てかなに、「イモータル」？なにそれおいしいの？何とも形容しがたい表情で叫ぶもんだから、こっちは呆気に取られるしか無いじゃないか。

とにかく、この状況は非常にマズい。この流れから考えても、オレがこの婆さんに何か猛烈な勢いで勘違いされているのは間違いない。で、とんでもなくヤバい事をされそうなのは確定的に明らかだ。

「ちよっ、ストップだ！昔の人は言ってくれたぜ！話せば分かる！
ストップ！タンマ！フリーズ！ザ・ワールド！時よ止まれっ！！」

「息子の仇　息子の仇　息子の仇　息子の仇　息子の仇　息子の仇
子の仇　ブツブツ……。」「

おーまいごつど。じーざす。がつでむ。ナンテコツタイ。この婆さん、こつちの話をマトモに聞く気がねえ。

「この一週間、私が蓄積した魔力を爆発させ、お主にぶつけてくれる……！」

「だが断る！」

……ん？魔力の蓄積？この婆さんの出で立ちといい……、まさか。オレの頬を冷や汗が伝う。

「《マジカル・エクスプロージョン》っ!!」

「やっぱりかああああああっ!？」

婆さんが叫んだと同時に、その杖先から稲光が迸り、視界一面を白に染め上げられ……、大爆発が起きた。

ハズだった。

「……ん？」

いつまで経っても、爆発も閃光も進らない。何事かと老婆を見やる。先ほどのまでの光り具合はどこへやら。老婆の杖先は固まり、そこに埋め込まれた宝玉は輝きを失っていた。

流石のオレも些か不穏な空気を感じずにはいられない。なにしろ老婆は直立したまま凍ったように静止して、その表情は驚愕に染まり、瞼は見開かれているのだ。正直、不気味すぎる。

ふと、その視線がオレの左腕に向けられている事に気付き、オレも一緒に見やってみる。

「……なんだこりゃ。」

……なんとまあ。デュエルディスクが装着されているじゃないか。しかもアニメとかでも見たこと無いような代物だった。

見た目的にはGX世代のヤツだが、全体的なカラーは珍しい褐色に沈んでいる。ここまでは良い。問題は、腕部、つまりライフポイントのカウンターとかが有る所が異質だった。

回転式拳銃の弾倉のようなモノが埋め込まれているのだ。そこだけがどうにも生々しい。生々しすぎて全体的なデザインとのミスマッチが甚だしい。

……理解が追い付かん。答えを求めるように、未だ杖を構えて立ち

尽くす老婆を見やるが、相変わらずビデオの一時停止みたいに硬直したままだ。そろそろ動けよ。

とゆうか、不可解な出来事の連続にパニックを起こした脳みそが付いていけて無いらるか。やけに冷静にいられる自分が怖い。現に今ほつぺを抓ってみる。うん、痛い。ツイストしたから特に。てか、このベタなネタを最初に考えた人ってスゲーよね。

閑話休題。……沈黙が痛い。なんとなく居心地が悪くなってきた。どうにも沈黙は苦手なので、たまらず口を開いてみる。

「……………え〜っと？大丈夫で、ごさいましてーか？」

「…………勇者さま。」

「…………は？」

あれ、デジャヴュ？婆さんがいきなり意味不明な単語を呟いたから、オレが思わず間抜けに声を上げる。しかし相変わらずヴュの発音が難しい。

「勇者さまあああつ!!」

「はあ!？」

老婆の凄まじい形相、リターンズ。だが今度は、叫ぶと地面におでこを擦りつけんほどの土下座を繰り返しやがった。

おいおい、何なんだいったい……。

「私は《執念深き老魔術師》じゃ。ここ《魔法族の里》の長老でもある。」

「ああ……、やっぱ？」

「？」

あの後、どーにか頭を上げてもらって、ようやく婆さん、もとい《執念深き老魔術師》も自己紹介ができるくらいに落ち着いてきた。

てゆうかホントに似てるなオイ。コスプレ大会とか出たら優勝しそ
うだな。まあ、本人そのもの……らしいし、当たり前といえば当た
り前か。でも誰も興味無さそうだな。

さてはて、オレはナニのドコから問い詰めればいいのかね。……よ
し、折角の「遊戯王」だし、チェーン処理みたく逆順処理を試み
よう。

「えーっと、先ず一つ目の質問。

……勇者さまとか言ってたけど、何それ。」

“勇者”という単語に反応して、《執念深き老魔術師》は再び土下

座をしそうになったもんだから、慌てて右手で制した。まったく、この応酬だと話が進まん。

体裁を取り繕うようにゴホンと咳払いを軽く吐いて、《執念深き老魔術師》は口を開く。昔のRPGだと、こういう長老だか王様だかが「魔王を倒すのじゃ！」てな感じで、色々教えてくるんだよね。

「う、うむ。勇者さまはな、今から20年ほど前に、突然この世界に現れた1人の男の事でのお。」

「20年前？伝説の類にしちゃあ、それほど古くない話だな。」

「その男は、おぬしのように《次元の裂け目》を通過してこの世界にやってきての。」

「《次元の裂け目》？」

ああ、あれか。もう一度、頭上の屋根に開いた穴を見上げてみる。その上には、もう紫色の空間は無くなっていた。あらま。

てゆーか《次元の裂け目》ってアレだよな？【剣闘獣】とかにたま

ーに入ってる永続魔法の。アレには昔のオレの【ダムドビート】も苦しめられたもんだ。え、勝敗？訊くな。

「勇者さまは邪神によって混沌としたこの世界を再び一つに纏め上げ、邪神を討ち滅ぼし、平和を齎してくださったのじゃ。」

「邪神ねえ……。」

勇者さまも大変だったんだねえ。オレは邪神とやらと戦う気なんざまったく起きないな。まあ、もう討ち滅ぼされたってんなら、もう関係ないし。

「で、その勇者さまとやらも、このデュエルディスクを装置していたと。」

「うむ、そうじゃ。」

左腕を上段に構え、《執念深き老魔術師》にデュエルディスクを翳す。しかし勇者さまとやらも、よくもまあこんな剣呑なデザインの代物を使ったもんだ。望んだデザインじゃ無いんだろぅがね。オ

レは好きだけどね、こつこつ。

「……うし、じゃ、二つ目の質問。「イモータル」って何。」

「うむ。「イモータル」とは、つい最近現れた闇の軍団の名前じゃ。この世界の各地に突如出没し、虐殺と支配の限りを尽くしておるのじゃ。」

「イモータル……不死者か？」

「いや、確かにアンデットもいるが、基本的に表立って動いておるのは悪魔が多いの。」

ふうん……。ほとんど名ばかり、って奴かね。しかし、ライトノベルとかもそうだが、現実とは事情の違う物事の話は眠くなる話ばかりだな。そっぴや宿とかどうしよう。

「それなら里に空き家が1つ在るからの。そこを使っておくれ。過去に勇者さまがそこを使っておられてから、我々はそこを常に空き家にしておるのじゃ。」

「お。じゃ、お言葉に甘えて。」

あの後、思い出したように、いきなり屋根に穴が開けられたただの、家が散らかったのだとブチブチと愚痴を言われ始めたので、オレは慌ててその場を後にした。流石は《執念深き老魔術師》。勇者さまと崇めておきながらも、しっかりと恨み辛みを吐露するのは忘れないうてか。

短い距離だったが、最近家は家に引きこもってばかりだったから、久しぶりに全力で走った気がする。学校が関連するもの以外で最後に走ったのはいつだったか。確か中学二年生の頃、近所のカードシヨップで開催された遊戯王の大会に遅刻しそうになって走った時だったっけな。

しかし、やはり突然運動をするのは良くないな、うん。もう息が切れかけてる。体力を失って重くなった体に鞭打ち、同じく重くなった脚を引き摺って場所を教えられた空き家へと向かう。

なんとなく振り返れば、木々の向こうで沈んでいく太陽の陽光が残照となって樹林の輪郭を優しく照らしていた。

「やっぱり異世界にも太陽は有るのか。」

そう、オレはもうこの世界が異世界の類であることを《執念深き老魔術師》の話の内で察していた。敢えて厳密に言つと、《次元の裂け目》の辺りか。

自分は今異世界、つまり非日常の世界で独りになったというのに、直ぐに許容できているオレ自身に驚かされる。これも常に二次元世界へのトリップを願っていた賜物か。そこ、笑うな。オレは真剣だぞ。中学時代から今年に掛けて、元旦の初詣では悉くトリップを願っていたほどだ。一途だろ？

「（……で、オレは何を電波な事を。）」

1人で電波乙的な事をやっていた自分に苦笑して、再び空き家への道を進んでいく。

空き家までの時間はそこまで掛からなかった。沈む夕日を眺めてから歩いて数十秒も経っていない場所に、空き家は静かに佇んでいた。

勇者さまとやらが使っていたというから、少しばかりゴージャスな物を想像していたが、だがしかし、そうは問屋が卸さない。現実には常に厳しいのである。長老や通り過ぎた他の家屋と寸分変わらない藁葺きの一軒家（？）に、思わず肩を落とす。

いやいや待てオレ。タダで宿を提供してくれたんだ。それだけでも感謝せねば。その上に、このあと里を挙げて勇者さまの祝賀パーティーをささやかながら開いてくれるという。うんうん、良い人達だ。勇者さまさまというべきか。

パーティーにも心躍るが、取り敢えず今は睡眠を取らねば。色々とありすぎて心身共に気だるくて眠い。

容赦なく襲い掛かる眠気と格闘しつつ、空き家の木製のドアを開けて中に滑り込む。

「……………おお。」

入ってみればなんとまあ。この空き家、外見は寂寥感を漂わせるが、室内はそれほど悪くない。狭いのはまあ仕方ないとして、掃除や手入れが各所に行き届いている。勇者さまとやらが使ってから、聖域のような扱いでも受けてたんだろうか。

備え付けのベッドにダイブイン。ギシリと軋み、シーツが乱れるが、そんな事は気にしない。だって眠いんだもの。

瞼をゆっくりと閉じ、夢の世界へと旅立とうとするオレの脳裏に、ふと1つの問題が浮上した。

「《次元の裂け目》が無くなったが、還る時どうすんだ……。」

それは困る。明日はニコ動に“超電磁砲”の最新話がアップされるのだが。困るポイントは“本来なら”そこでは無いんだろうけど、生憎オレは樂觀主義者。困るのは自分の趣味が阻害される事。

……まあ良いや。取り敢えず今は寝よう。考えるのはその後も遅くないだろうし。婆さんに訊いてみ、て……

そのままオレは睡魔に誘われるように意識の泥中へと沈んでいった……。

第3頁 燃えさかる大地（前書き）

今回で初めてデュエルシーンがあります。

しかしライフが8000制なので長いです。ご注意ください。

第3頁

燃えさかる大地

「……ん？」

何やら外が騒がしい。もしかしたら祭りがもう始まってしまったのか。もう少し睡眠を欲しがる寝起きで気だるい体を叩き起こし、この空き家に唯一建て付けられたガラスの無い吹き抜けの窓へと近付き、そこから外を眺めてみる。

あちこちで炎が踊り狂い、視界一面に広がる里を赤々と染めていた。大地を舐め、草木を焦がし焼き払うそれらは、決して灯りの類ではない。そして同じくあちこちで叫び声が木霊する。悲痛なそれは、歓喜によるものではないのは容易に想像できた。

再び悲鳴が上がり、オレの耳に飛び込んできた。それはオレの足を衝動的に動かせるには十分だった。

ぶち破る勢いで思い切りドアを開いて、オレは空き家から飛び出した。周囲をぐるりと一巡して見渡せば、飛び込んでくる光景は、人こそ居ないものの、炎が里を蹂躪する、悉く凄惨たるものだった。

「うつ……。」

黒煙が目と鼻を刺激する。オレはたまらず右手で鼻を覆い隠すが、目を襲う煙は遮断しようがない。生理現象で涙が滲んでくる。それでも、少しでも煙から目を庇うように、瞼を僅かに下ろして目を細める。

生存者がいないか、再び周囲をぐるりと見渡してみる。すると、その一角の向かいから誰かが覚束ない足取りで駆けてきた。

「勇者さま！ご無事かの！？」

《執念深き老魔術師》だった。まったく、そんなご老体で無茶をする。いや、今はそれどころではない。

「長老！いったい何が起きてんだ！？」

「……うむ、「イモータル」が襲撃してきたのじゃ。此処は老人と子供しか居らぬ、辺鄙な里じゃというのに……。」

おいおいマジかよ。なんだか波乱の予感がしてきたぞ。

「だがまあ、婆さんが無事で何よりだな。」

「……じゃが、他の里の者は皆、「イモータル」に……。」

「ギャーッギャッギャッギャッ！」

「!？」

突然、金切り声のような下品な笑いが響き渡る。笑い声が聞こえた方向に振り向いてみると……

「よしよし、良いぞ良いぞ。これでこの里はオシマイだなあ。ギヤッギヤッギヤッギヤッ！」

緑色の小柄な体躯に赤いローブを羽織った悪魔が、神輿のように担がれた玉座に鎮座し、下卑た笑い声を上げていた。その笑い声に釣られるように、担ぐ四匹の悪魔も同じように下品な笑い声を上げる。

玉座に腰掛ける悪魔には、見覚えがあった。遊戯王のカードにも有ったソイツは、オレも実際に持ってたカードだった。使い勝手こそ良くないじゃじゃ馬だが、専用デッキを組めば良い働きをしたのを覚えている。

オレは確信していた。コイツが今回の事件の首謀者だと。昔は愛着を込めて読んでいたその名を、今は忌々しげに、吐き捨てるように紡ぐ。

「……《キングゴブリン》！」

「……んん？」

自分の名前を呼ばれた事に気付き、小柄な悪魔、もとい《キングゴブリン》は玉座の神輿を担ぐ配下のゴブリン達に何か指示を出した。すると、配下のゴブリン達は方向転換し、こちらへと向かってきた。両者の距離が数メートル程まで接近すると、《キングゴブリン》は首を擡げてオレを睨む。

「……なあんてまだ里の人間が残っているのだあ？しかも私の名前まで知っている人間が。」

「ギギッ、申し訳アリマセン……。」

《キングゴブリン》がオレに投げかけたであろう問いに、玉座の神輿を担ぐゴブリン達が謝罪という形で答えた。代理の返答どーも。

オレの中では既に確信が付いているし、それに基づいた結論も付いている。だが、一応本人の口から答えを訊かなきゃ気が済まん。

「……お前か。この里の人間を消したのは。」

もしかしたら、昔オレが使っていたカードへの愛着から、コイツの無実を証明したかったのかもしれない。

だが、《キングゴブリン》は間髪入れない即答で、笑いながらオレの望みを打ち碎いた。

「ギヤーッギヤッギヤッ！キサマは道を歩くとき、いちいち地面を向いてアリを踏まないように気を付けるのか！？」

「きつ、貴様！里の皆を蟻などと！」

「我々には偉大なる「イモータル」以外の生命は、全てアリと等しいのだ！ギヤーッギヤッギヤッギヤッ！」

癪に障る物言いで答えた《キングゴブリン》の嘲笑に、配下のゴブリン達も嫌らしくせせら笑う。

その途中で、《キングゴブリン》はオレが装着するデュエルディスクに気付いたように身を乗り出してオレの左腕を見やった。

「……ほう。キサマもデュエルができるのか。丁度いい。この里のアリどもはデュエルもできんな。退屈していたのだよ。」

そういつて《キングゴブリン》は玉座の背もたれの後ろからデュエルディスクを取り出した。本人の体のサイズに見合ったチビサイズだ。

「見たところオモシロいデュエルディスクを持っているようだな。戦利品として持ち帰ってやろう。」

もちろん。《キングゴブリン》は含んだ念押しをすると、ゆっくりと右腕を挙げる。

その所作が何かの合図だったのか、どこからともなく十数体のゴブリン、《ゴブリン突撃部隊》が集結し、オレ達の周囲をぐるりと囲んだ。

「逃げたりは、しないよなあ?」

売られたケンカは買わないが、オレが売られて買うものは食い物と
同人誌と、今回のコレだ。

「……逃げたりするかっての。売られたデュエルは全部買ってやる
よ。お釣りも返してな。」

闘争意識を剥き出しに、オレも胸の前にデュエルディスクを水平に
構える。……お、元からデッキは入ってるのか。どんなデッキが確
認してないが、まあ大丈夫だろ。

ガチンツ！

「……ん？」

撃鉄が叩かれたような鈍い金属音が、オレのデュエルディスクから
鳴り響いた。どうやら音の発信源は、オレのデュエルディスクの弾
倉が僅かに回転し、止まった時の音のようだ。

奇妙な動きを見せたオレのデュエルディスクを訝るように、《キングゴブリン》は眉を顰めた。オレだって変に思ってるっての。

「キサマ、何をした？」

まあ妥当な質問だよな。だがオレは知らん。このデュエルディスクが勝手に動いただけだ。

「……まあいい。では、始めようか。」

「オツケエ。んじゃ、」

「「デュエル!!」」

海瀬 総一	LP・8000
キングゴブリン	LP・8000

「ターンランプはオレだな。先行、ドロー！」

うし、初手からデッキのエンジンが来たな。後は上手くターボして、キーカードを早く引く！

「モンスターを1枚、カードを2枚セットしてターンを終了する！」

初手から築けた布陣はまあまあか。取り敢えず現時点では順風満帆か。

「私のターン、ドロー！序盤から守りとは、貧弱だなあ。ギャーツギャツギャツギャツ！」

うつせ。お前には戦略という概念は分かんたろうよ。

「私は《ゴブリンエリート部隊》を攻撃表示で召喚する！」

《ゴブリンエリート部隊》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 悪魔族 / 攻2200 / 守1500

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

《キングゴブリン》の前に、華美な鎧を纏ったゴブリンの集団が立ち並んだ。細身の剣を構え、隊列を作るゴブリン達からは、名の通りのエリート性と統率性が伺える。

しかし、攻撃力2200か。そういや昔使ってたっけ。《ゴブリン突撃部隊》より攻撃力少ないけど、その分守備力が1500もあったから、使い勝手は良かったな。《サイバー・ドラゴン》も倒せたし。でもシンクロとかに押されて環境から消えたんだよね。

「どうせ守備力の高い壁モンスターで凌ぐつもりだろうが、ムダだ！更に装備魔法《団結の力》を《ゴブリンエリート部隊》に装備する！」

《団結の力》

装備魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力・守備力は800ポイントアップする。

《ゴブリンエリート部隊》は結束し、指揮が上がり力が高まってく。これで攻撃力は3000かよ、高えな。しかし、事実上は1人だけなのに《団結の力》で攻撃力が上がるとは如何なものか。

「《ゴブリンエリート部隊》でセットモンスターへ攻撃だ！」

《ゴブリンエリート部隊》が剣を構え、一斉に襲いかかってきた。うん、怖い。しかもアニメによれば、異世界ではデュエルのダメージが現実になるとか聞くし。……それは勘弁してほしい。

「攻撃宣言時に手札の《融合呪印生物・地》をコストに、罨カード《ホーリーライフバリアー》を発動！」

《融合呪印生物・地》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 岩石族 / 攻1000 / 守1600

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。
その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。
フィールド上のこのカードを含む融合素材モンスターをリリースする事で、地属性の融合モンスターを特殊召喚する。

《ホーリーライフバリアー》

通常罫

手札を一枚捨てる。

このカードを発動したターン、相手から受ける全てのダメージを0にする。

白く輝く薄いヴェールのような障壁が、オレを護るように、ドーム状に形成される。これでこのターンはオレへの被害は一切無いって訳だ。良い効果だけど、《ホーリーライフバリアー》ってコストが重いんだよね。まあ今回は別に良いけど。

「ふん、バカめ！《ホーリーライフバリアー》ではモンスターを護れんぞ！」

《キングゴブリン》が鼻で笑う。あゝ、あるあるこういう勘違い。オレも昔は勘違いしてたもんなあ。これも早くテキストを明文化すれば良いのに。

「いやいや、《ホーリーライフバリアー》は相手からのあらゆるダメージを0にする。つまり、“オレのモンスターに対してのダメージも0にする”ぞ?」

「な、ぬっ……!?!」

「つまり、オレのモンスターはこの戦闘で破壊されない!」

一気呵成に《ゴブリンエリート部隊》が刃を振り下ろす。だが、刃は寸前で悉く白い障壁によって弾かれる。

そして、仕留め損なったモンスターが正体を現す。悪いね、アド稼がせてもらっぜ。

「そして《メタモルポット》のリバース効果を発動する!互いに手札を全て捨て、デッキからカードを5枚引く!」

《メタモルポット》

効果モンスター

星2 / 地属性 / 岩石族 / 攻 700 / 守 600

リバーズ：自分と相手の手札を全て捨てる。その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

ゲタゲタと笑う《メタモルポット》の壺の口から風が吹き荒れ、両者の手札を吸い込んだ。

「ぐ、人間ごときが……！」

恨み言を呟いて、《キングゴブリン》はデッキからカードを新たに5枚引く。……なんか捨てられた手札に《スカゴブリン》が見えたんだが。

《スカゴブリン》

通常モンスター

星1 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 400 / 守 400

完璧な「スカ」の文字を極めるため、日々精進するゴブリン。その全てを一筆に注ぐ。

……ゴブリンデッキと特定。シナジーは考えられて無いものと思われる。

「カードを1枚伏せ、ターンを終了する！」

「オッケー。じゃ、ドロー。」

お、良いね良いね。次はコレで行ってみるか。《ゴブリンエリート部隊》は……、守備力2300か。対処できるが、取り敢えず今は無視。

……ん？

「《メタモルポット》を守備表示に変更し、更にカードを2枚セツ

トしてターンを終了する！」

……なんで。

「ギャーッギャッギャッギャッ！護ってばかりでは勝負には勝てんぞ！？」

そついうデッキコンセプトなんだ。諦めてくれ。

……オレは。

「私のターン、ドロー！私は《ゴブリン突撃部隊》を召喚！」

《ゴブリン突撃部隊》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更でき

ない。

《ゴブリンエリート部隊》に続き、その一軍の隣に新たなゴブリンが大挙して現れた。並び立つ《ゴブリンエリート部隊》と違って、簡素な最低限の防具に棍棒、そして列居できていない辺り、統率も行き届いていない無法者の集まりのようだ。

やはり、魔法カードと罠カード以外は全部ゴブリンと名前にあるモンスターで構成されたファンデッキか。ゴブリンはどれもこれも攻撃力が高いから、ファンデッキにしては打点が高いのは厄介だな。

「私のフィールド上に表側表示のモンスターが増えた事で、《ゴブリンエリート部隊》の攻撃力が更にアップする！」

おーおー、攻撃力3800か。守備で良かったな。……つつても、守備力も3100と高いな。

「更に手札の《ハンマーシュート》をコストに、装備魔法《破邪の大剣 バオウ》を《ゴブリン突撃部隊》に装備する！」

《ハンマーシュート》

通常魔法

フィールド上に表側攻撃表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。

《破邪の大剣 バオウ》

装備魔法

手札のカード1枚を墓地に送って装備する。

装備モンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

このカードを装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、そのモンスターの効果は無効化される。

《破邪の大剣 バオウ》か、懐かしいな。今じゃ《レインボー・ヴェール》にお株を奪われてるぞ。まあリクルーターとかの墓地で発動する誘発効果にも有効なのが勝る点か。

《レインボー・ヴェール》

装備魔法

装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、そのバトルフェイズの間だけ相手モンスターの効果は無効化される。

てゆーか《ハンマーシュート》って。確かに《ゴブリン突撃部隊》は写っているが、やられているシーンだぞ。良いのか？

「ふん、なんとも言う方がいい。ゴブリン達は私の僕だ。僕をどう扱おうと、支配者の自由だ。」

あーそーかい。しかし昔の人は「天は人の上に人を造らず。人の下に人を造らず。」って名言を遺したんだぜ？

「減らず口を……。その口を黙らせてやろう！《ゴブリン突撃部隊》で《メタモルポット》に攻撃！」

おっと、来たよ来たよゴブリンの群れが。先陣切って大剣振り回してるヤツが特に怖いな。その狂乱っぷりとかが。

だが残念。こっちもまだまだドロエンジンには働いて貰わんといかんのだよ。労働基準法に違反しているかもしれんが、死体に鞭打

たれてる過労死ウォリアーとかに比べりゃ、フィールドに留まってるだけマシさ。

「じゃ、攻撃宣言時に速攻魔法《月の書》を発動！オレは自分の《メタモルポット》をセットする！」

《月の書》

速攻魔法

フィールド上の表側表示モンスター1体を裏側守備表示にする。

突然現れた青い書物の表紙を開くと、青い光が溢れて《メタモルポット》を包み込み、その姿を眩ませた。現実世界じゃデュエルディスクはただのオモチャだが、こっちは歴とした本物だ。カードの発動の一つ一つにも、ご丁寧に全て特有のエフェクトが入る。いつかは社長の物真似をしてみたいもんだ。

「バアカめ！再びリバーズ効果を発動するつもりなんだろうが、《破邪の大剣 バオウ》によって、戦闘破壊したモンスターの効果は無効化される！」

分かってるってそのくらい。分かっててこっちは動いてんだよ。

「戦闘破壊すれば」、な。《月の書》にチェーンして罠カード《和睦の使者》を発動！」

《和睦の使者》

通常罠

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける戦闘ダメージは0になる。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

迫り来る《ゴブリン突撃部隊》の前に、数人の女性達が立ちほだかる。するとゴブリン達の攻撃と勢力から力が失せ、同時にその攻撃は潜むモンスターを軽く小突く程度の威力しかなかった。

ちなみに《和睦の使者》は英語名がテキトーな事で有名だ。詳しくは各自で該当ページを参照してほしい。

「ぐぐぐ……！ちよございな……！」

ちよございで悪かったな。このデッキは《メタモルポット》でデッキを回転させるデッキだからな。《レインボー・ヴェール》じゃなくて本当に良かったぜ。

……なんでオレは、このデッキの動かし方を知っている？

「じゃ、攻撃された事で再び《メタモルポット》のリバース効果が発動する。オレは手札4枚を捨て、5枚ドロー。」

「私は2枚捨て、5枚ドローだ。……今回は、お前の方が損をしたなあ！？ギャーッギャッギャッギャッ！」

ま、そうかもな。

「で、どうする？攻撃した《ゴブリン突撃部隊》は、《ゴブリンエリート部隊》と同じく守備表示になるぞ。」

「ふん、強がりおつて。ならば私はカードを1枚伏せ……、」

おおつと。ちよつと待った。フェイズとカードの発動の確認は怠るなよ。オレも人の事は言えんけどね。

「？」

「バトルフェイズの終了する前のタイミングに巻き戻し、畏カード《マジカルシルクハット》を発動！」

《マジカルシルクハット》

通常罠

デッキからモンスター以外のカード2枚とフィールド上の自分のモンスターを1体選択し、デッキをシャッフルする。

選択したカードをシャッフルし、フィールド上に裏側守備表示でセツトする。

デッキから選択した2枚のカードはモンスター扱い（攻・守0）となりバトルフェイズ終了時に破壊される。

この効果は相手バトルフェイズにしか使えない。

「オレはデッキからモンスター以外のカードを2枚選択し、セットした《メタモルポット》とシャッフル！」

うむむ、サーチした後にデッキをシャッフルするのはデュエルディスクが自動でやってくれるのは有り難いが、流石にこういうフィールドの数枚のカードをシャッフルするのは自分でやらなきゃいけないか。

ま、デッキだけでもシャッフルしてもらえただけでも十分か。単純に考えても手間が2つから1つになるし。

「で、ランダムにカードを並べて、と。……セツトモンスターを破壊する類のカードが有るなら使うのを勧めするぞー。」

「グウウ……、バトルフェイズを終了する！」

「じゃ、バトルフェイズ終了時に《マジカルシルクハット》で伏せたカードが破壊されるが……。」

《キングゴブリン》の攻め手が止んだ途端、オレの前に横一列に並んだ3つのシルクハットの内、左右両端のが粉々に粉碎される。やっぱり急拵えの壁だから、長くは持たないんだろうな。

悪いね。悉くアドバンテージを稼がせてもらうぜ。

「セットしていたカードは2枚とも《荒野の大竜巻》だ！セットしたこのカードがカードの効果で破壊された時、その効果が発動する！」

《荒野の大竜巻》

通常罨

魔法＆罨カードゾーンに表側表示で存在するカードを1枚選択して破壊する。

破壊されたカードのコントローラーは、手札から魔法または罨カード1枚を選択してセットする。

また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

「オレが破壊するのは当然、《ゴブリン突撃部隊》と《ゴブリンエリート部隊》だ！」

現れた《荒野の大竜巻》の立体映像が砕かれたガラスのように弾け飛び、その残滓を巻き上がる一陣の突風が周囲に撒き散らす。

破壊の嵐は蔓延る《ゴブリン突撃部隊》と《ゴブリンエリート部隊》を巻き込み、粉々に爆砕する。あくまでも立体映像が粉々に吹き飛ぶだけだが、生命体が死に絶えるのはやっぱり気分が悪い。

「……じゃ、お前のメインフェイズ2に移行するか？」

挑発的に言えば、案の定は眉間キンクゴリンに皺を寄せて渋面を曝す。歯軋りして呻いてるし、余程悔しいのか。

「グウウ……、更にカードを1枚伏せ、ターンを終了する！」

お、最終的に行ったアクションはカードを1枚セットしただけか。まだ2つ伏せる事ができるのに、それをしない。つまり、残りの手札は全てモンスターメタモルボットって事か。伏せたカードも、多分の被害を減らすためだけに伏せたカード、つまりブラフの可能性が高いな。

「オレのターン、ドロー。」

さて、そろそろ頃合いかな。とはいえ、まだキーカードがどうにもなっていないけどな。

「カードを2枚セットして、《メタモルポット》を反転召喚！そしてリバース効果を発動する！」

メタモルポット
三度が姿を現しゲタゲタと喧しく笑う。そして互いの手札を自身の潜む壺へと吸い込んだ。

「私は4枚捨てて5枚引く。」

「オレは4枚捨てて5枚だな。……お。」

やっとキーカードが来やがったか。墓地のは……11枚。十分だな。その下準備を万全にする、最後の締めも揃っているし。

動くか。

「まずは《コアキメイル・サンドマン》を召喚！」

《コアキメイル・サンドマン》

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻1900/守1200

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、手札の岩石族モンスター1体を相手に見せる。または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。

相手が罠カードを発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

地面の砂が集まり、それは固まっずんぐりむっくりな体型をした砂の巨人を形作る。地面から這い出るように、砂塵の塊の巨人はゆっくりと立ち上がる。……オレ、今回のデュエルで初めてアタックを出した気がする。

チラ、と《キングゴブリン》の反応を窺ってみる。……うし、今の

ところカードは起動されてこないな。となると、召喚反応型の罠カードは、伏せられているとすると、1枚以下の可能性が高いな。

「伏せてあった魔法カード《おろかな埋葬》を発動！オレは《ビッグ・ピース・ゴーレム》を墓地へ送る！」

《おろかな埋葬》

通常魔法

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

《ビッグ・ピース・ゴーレム》

効果モンスター

星5/地属性/岩石族/攻2100/守 0

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで召喚することができる。

さて、勘の良い読者はそろそろ、いや、中盤辺りからお気付きだろう。【岩石族】で此処まで執拗に、そして異常に墓地を肥やす理由

を。

「オレは墓地の岩石族モンスター、合計12体全てをゲームから除外し……。」

デュエルディスクから半ばに飛び出した12枚のカードを根こそぎ抜き去り、それをジーンズのポケットに仕舞う。これが除外する方法である事はアニメを見て知っていた。

除外した岩石族のモンスターが次々と砕け散り、その破片が上空高くで集い、凝縮し、1つの巨大な姿を形作る。

「《メガロツク・ドラゴン》、降、臨!!」

《メガロツク・ドラゴン》

効果モンスター

星7/地属性/岩石族/攻 ？/守 ？

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する岩石族モンスターを除外する事でのみ特殊召喚できる。

このカードの元々の攻撃力と守備力は、除外した岩石族モンスターの数×700ポイントの数値となる。

「除外した岩石族は12体。12×700で、《メガロツク・ドラゴン》の攻撃力・守備力は8400となる！」

轟音のような咆哮を上げ、《メガロツク・ドラゴン》は威風堂々と雄々しく立つ。その巨体は圧倒的な威圧感を誇り、見る者を震撼させるほどである。いやはや、デュエルディスクってのはスゴいな。使ってるオレもビビっちゃう。

「……さて、そろそろフィニッシュも近くなってきたか？」

取り敢えずは安っぽく挑発を試みる。漫画やアニメじゃ良くやっているが、現実じゃ挑発なんてやったら注意されるからな。こういうところで思う存分やってみたかったんだよ。ルールとマナーは守って楽しくデュエルしようぜ！

だが、オレの予想に反して、《キングゴブリン》は特に動じた素振りを見せない。それどころか、口を三日月状に釣り上げ、邪悪な笑

みすら浮かべたほどだ。正直、気持ち悪い。だが、更に気持ち悪かったのは次の瞬間からだった。

いきなり、“タガ”が外れたように《キングゴブリン》は大口を上げて爆笑した。金切り声のような笑い声だから、気持ち悪い上に耳障りだ。

「ギャーッギャッギャッギャッ！《メガロック・ドラゴン》
スキルドレインの特殊召喚時に永続罫を発動する！」

《スキルドレイン》

永続罫

1000ライフポイント払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

キングゴブリン LP・8000 7000

おお、なるほど。確かにゴブリン達はデメリットアタッカーが多いからな。ライフコストこそ有るが、《最終突撃命令》よりはこちら

のほう相手が相手への影響力が強いし。良い選択かな。

《最終突撃命令》

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

ちなみにアニメでは上記の効果に加えて、「発動時に、お互いはデッキのカードが3枚になるようにカードを墓地に送る」効果があったんだぞ。原作とかアニメってチートカード多いよな。

閑話休題。《スキルドレイン》は流石にマズい。なので、封殺する事にしよう。

「《スキルドレイン》の効果により、《メガロック・ドラゴン》の攻撃力と守備力は0になるのだあ！」

「うん、それ無理。《コアキメイル・サンドマン》をリリースし、効果発動！《スキルドレイン》の発動を無効にして破壊する！」

《コアキメイル・サンドマン》が肩を前衛に構えて《スキルドレイ
ン》の立体永続目掛けて突進し、衝突した。

両者がぶつかった衝撃で、《コアキメイル・サンドマン》も《スキ
ルドレイン》も粉々に弾けて霧散した。

「……さて、もう一回訊いとくか。そろそろフィニッシュが近くな
って来たか？」

「……まだだ、まだ終わらんよ！」

おお、シャアの台詞だ。意図して言ったんじゃないだろうが、や
っぱりテンションが上がる。

「っつこ、これ！何をするっ！」

ん、何だ？背後で掠れた悲鳴が木霊したので、ゆっくりと振り返っ
てみる。だが忌々しくも、予想はオレを裏切らなかった。こういう

時くらいは空気を読まなくてもいい！

案の定、オレの背後で今まで空気だった《執念深き老魔術師》が、どこからともなく現れた黒装束のゴブリン、もとい《ゴブリン暗殺部隊》にヘッドロックを食らい、頬に短刀を突き付けられていた。老人は大切にしようぜ。

「……小悪党っぷりも、しっかり板に付いてやがんなあ。《キングゴブリン》。」

「ギャーッギャッギャッギャッ！何とでも言うがいい！私に攻撃すれば、あの老いぼれの命は無いぞ！」

……しかし人質が、厄介だな。いや、人質が厄介なんじゃなくてな？人質って策を取る《キングゴブリン》が厄介って意味だよ。昭和の悪党の常套手段だが、いざオレにされるとは。そういえば平成の悪党って人質とかって取るのか？

さて、どうするか。確か《ゴブリン暗殺部隊》って攻撃力1300だったよな。まあ召喚されたヤツじゃないから攻撃力とかが関係するか分からんけど。

婆さんには隙を見て自力での脱出は……多分、無理だな。老体で現役な暗殺者から拘束を解いて逃げ果す事は難しいだろうし、攻撃力に3倍近くの差がある。後者が関係するかどうかは知らんが。

じゃあ魔法、というか罠？とにかく、婆さんの必殺技(?)の《マジカル・エクスプロージョン》は……、これも多分、無理だな。使おうとした婆さんを見る限り、発動には時間が掛かるみたいだし、何より効くか分からん。

そもそも、もし今婆さんを捕らえている《ゴブリン暗殺部隊》をどうにかしても、後続が潜んでいる可能性が高い。それじゃあ最終的にオレ達が不利になるのは火を見るより明らかだ。

ならいつそ、オレがどうにかするか？手札の《ギガンテス》を特殊召喚して、《ゴブリン暗殺部隊》をブツ飛ばすように仕向けるか？関係するか知らんが、攻撃力は勝ってるし。

《ギガンテス》

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻1900/守1300

このカードは通常召喚できない。自分の墓地の地属性モンスター1体をゲームから除外して特殊召喚する。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。

……いや、やっぱり駄目だな。コイツを出した瞬間に怪しまれる。下手に前振りなんてしたら婆さんがお陀仏だ。枷が無くなるのはそれはそれで楽だが、それはオレの人徳に反する。それに色々世話になったからな。仇で返したくない。

敵が支配権を握るから、こちらからの手が一気に詰まる。もし手立てが有ったとしても、そこからは悉くこちらが後手後手になる。まったく、人質つてのは反則的な効力だな。

「ギャーッギャッギャッ！バトルフェイズに入れば、老いぼれの命は無いぞ！」

それはさっき聞いたっての。ああくそ、考えが纏まらん。もうこうなりや社長みたくカードを投擲して……いやいやいや、それは無理だ。物理的にも、色々な意味でも。

……仕方ねえ、か。少なくとも、婆さんを少しでも延命させねえと。

「オレは、バトルフェイズを……。」

だが、事態とはどう転ぶか、分かったものじゃ無い。それを痛感した。

「グギヤアッ！」

再び、オレの背後で悲鳴が上がった。だが今度は、婆さんのように噎れた声ではない。思い低音ボイス。さながらゴブリンとかが発しそうな悲鳴……、ゴブリン？

まさかと思い、即座に後方を振り向いた。そこには半分予想通りの、半分予想以上の光景が広がっていた。

突如介入した青緑の怪人が、《ゴブリン暗殺部隊》の1人を殴り飛ばしていた。怪人は体の関節部から刃のように鋭利な突起を伸ばし、その顔はまるで鰐のようだった。

だが、このモンスターは現実世界で見覚えがある。モンスター自体は使った事は無かったが、色々なカードに登場していたから良く覚えてる。驚愕に、思わずその名を呼んでみる。

「《ガガギゴ》……!？」

だが、その青緑色の怪人^{ガガギゴ}は沈黙したまま、呆然と立ち尽くす《執念深き老魔術師》を庇う。

……なんだか分かんが、取り敢えずは敵ってワケじゃねえんだな。

「……さあ、《キングゴブリン》！お前の罪を数えろあ！」

「ま、待ってくれ！話せば分かる！」

「だが断る」

狼狽しながら、怯えから引きつった表情のまま《キングゴブリン》は後ずさる。残念だが、お前に弁解の余地は無い！

「《メガロック・ドラゴン》で、プレイヤーにダイレクトアタアア
アック!!」

メガロック・ディザスター!!」

オレの背後に山の如く聳え立つ《メガロック・ドラゴン》が、鋭利な牙を並べたその口より、無数の岩石を豪雨のようにブチ撒いた。攻撃名が厨二臭いが、構うか!

「ヌギヤアアアアアアアッ!!」

キングゴブリン	LP・8000	-	8400	0
---------	---------	---	------	---

「キ、《キングゴブリン》サマガヤラレタ!?!」

「バ、バカナ!?!」

「ヒ、ヒイイイツ!」

断末魔の奇声を張り上げて、《キングゴブリン》は力無く玉座から地面に失墜した。それからやや遅れて、神輿を担いでいたゴブリン達も、それぞれ悲鳴を上げて逃げ出した。オイオイ、脆い忠誠心だ

な。

やがて、倒れ伏す《キングゴブリン》の軀が、黒い灰となって崩れ落ち、風化した。コイツは今までに何度も人々を虐殺してきただろうが、そんなヤツでも命は命だ。南無、と呟き合掌して、弔いの意を込めて灰の跡に一礼する。

「……………勝ったか。」

顔を上げた瞬間、どっと軀が気怠さに重くなる。オレはその場にゆっくりと腰を下ろして座り込んだ。

向こうから慌ただしく《執念深き老魔術師》が何か騒ぎながらこちらに駆けてくる。老体で無理すんなっての。

……………とにかく、初デユエルは何とか勝ち星。こんな事が続くと思うと……………、嫌になるね。

第3頁 燃えさかる大地（後書き）

次回はおそらくデュエルシーンは無いです。

すいません、説明を色々入れないと分かりにくいかもしれないので
（汗）

第4頁 頼もしき守護者（前書き）

すみません、不定期更新で。（土下座）

今回デュエルはしませんが、あのキャラクターが登場します。《ガギゴ》の辺りから察した方もいるのでは？

第4頁

頼もしき守護者

「……雨か。」

ポツ、と一滴の水がオレの頬を叩くと、空はたちまち水の怒濤を広範囲の眼下目掛けて降り注がせる。オイオイ、服の替えが無いんだから勘弁してくれよ。

しかし、私情を抜きにすれば、この雨は至極有り難かった。なにしろこの雨で、周囲の森や草木を赤々と燃やしていた火群を消してくれるのだから。

そう考えると、この豪雨も悪くないかもしれない。……しかし、ななたってこんなにナイスなタイミングで雨が降りやが

「勇者さま！勇者さま！」

うごごつ！ちよつ、婆さん！そんなに揺らさんでも良いから！だいたい勇者さまって……、オレか。

で、何だっただよ婆さん。切羽詰まってるからって、そんなに耳元で喚き散らさないでくれ。疲れた頭に結構響くんだよ。てか何で切羽詰まってるの。

「あああああの爬虫類は何じゃ!？」

爬虫類?と訝りながら、オレは婆さんが指差す先をゆるゆると振り向くと、そこには青緑色の体色の怪人が、惘然とした態度で立っていた。

……あなるほど。《ガガギゴ》か。そういえばすっかり忘れてたな。

まあ婆さんよ、多分大丈夫だ。なにしろ、さっき婆さんを助けたんだし、少なくとも敵じゃあない(多分)。

「……で、お前もデュエルすんのか？」

徐に立ち上がり、オレは胸元でデュエルディスクを水平に構えて《ガガギゴ》と対峙する。敵じゃあないというのが持論だが、警戒するに越した事は無い。

だが、未だに《ガガギゴ》は腕を組んだままこちらを凝視している。その眼差しに、オレ達への敵意は窺えないが……ん？

容赦なく降り注ぐ雨にぼやける視界の先。対峙する《ガガギゴ》の背後の雨のカーテンをかき分けて、誰かが小走りでこちらへと駆けてきた。

新手か？と眼光を鋭くしてその人影を見やる。人影はみるみるうちに迫り、パシャパシャと地面の水溜まりを踏みつけて飛沫を散らしながらも、一心にこちらへと近付く足取りは変わらない。

「お婆様！」

突然、凜とした声が人影から放たれてオレの耳に飛び込んできた。声色からすると、女みたいだが……、

「　　っはあ、よかった……。」「ご無事でしたか……。」

《ガガギゴ》の脇を通り過ぎ、隣に立つオレを完全にスルーして、
ようやく《執念深き老魔術師》の前で立ち止まった“彼女”は、髪
を乱して肩で息をしているという、疲弊しているのが一目瞭然とい
う出で立ちで現れた。ちなみに息を切らしてるってのに喋ろうとす
るな。余計疲れるぞ。

それにしても、この少女。どこかで見たことがある気がする。腰ま
で伸びた水色の綺麗なサラサラヘア、黒いアンダーシャツの上か
ら薄茶色の上着を羽織り、七分丈の短いスカート、というなかなか
可愛い服装の女の子

「（　　！！ぶはっ！？）」

心中でだが、オレは我ながら情けないストンキョーな悲鳴を上げ
ちまった。その理由は単純明快シンプルなものだ。新しい来訪者の
正体に度肝を抜かれたからだよ。ああ抜かれたともさ。

しかし、だ。想像してほしい。例えば自分の好きな二次元の女の子
が、突然現実世界にいる自分の目の前に、テレビから飛び出したと
しよう。……ビビるだろ？テンションも上がるだろ？で、現にオレ
は今、そういう状況に直面しちゃってるんだなコレが。

「まさか……エリアなのかい!？」

「ええ。久しぶりね、お婆様。相変わらず元気みたいで安心したわ。」

「じゃあ、あの爬虫類は《ギゴバイト》なんじゃな?……おやまあ、しばらく見ない間に、アンタ達は立派になって……。あたしゃ嬉しいよ。」

「お婆様、今は《ギゴバイト》から《ガガギゴ》に名前が替わったのよ?」

そう、エリアだ。あのエリアなんだよ。《水霊使いエリア》、というよりは《憑依装着 エリア》の方が姿的には近いか。下僕(?)っぽく《ガガギゴ》も従えてるし。とにかく、エリアだ。

やっべ、めっちゃ可愛い!それがオレの率直な感想だ。思わずカメラで写真を収めたい衝動に駆られるが、いくら何でもそれはマズい。犯罪だろうし。

理性を総動員し、リビドーを撲滅せんと孤軍奮闘するオレ。……っ

てカッコよくね？あ、カッコよくない？

「……ところでお婆様。こちらの彼は？」

一人悶々としていたオレを横目で一瞥しながら、エリアが婆さんに問いただが、その挙動に警戒の意識はあまり感じられない。多分、婆さんが一緒にいるから、過度に怪しまれてはいないんだろうな。

それにしても、ようやくオレの存在に突っ込んでもらえたぜ。このまま三沢と同じ空気のロードを歩み出すんじゃないかとずっとヒヤヒヤしてたぜホント。

「おお、そうじゃエリア聞いとくれ！このお方は、かの伝説の『勇者様』なのじゃよー！」

婆さん、その『勇者様』って呼び名は勘弁してくれねーか？オレも何が何だか分からんままに『勇者様』とやらの持ち上げられて、何だかむずがゆい。

「（勇者様、ね……。）『勇者様』でしたか。失礼を致しました。私はエリアと申します。」

ペコリと頭を下げて謝ってくるエリアは、何とも可愛らし……。いや、惚けている場合ではない。いつまでも女の子に頭を下げさせるほどオレは鬼畜じゃない。オレはあくまでも紳士。ジェントルマンだからな。

「いって、気にすんな。オレは海瀬^{かいせ}総一^{そういち}。できれば『勇者様』だ何だのって堅苦しいのじゃなくてよ、もっとフレンドリーにいこうぜ？年と同じくらいだし。」

うん、我ながらなかなかカッコよく決まってるんじゃないか？リア充じゃあ女の子の前ではこんなにナチュラルに接することができなかったからな。

満足感に浸るオレはさておき、エリアは一人で少々考え込んでいる。おそらく、今のオレの台詞を鵜呑みにするかどうか審議してるみたいだな。

ややあって、エリアが再びオレに視線を向けなおす。その表情に、先ほどからオレが受けていたお硬い印象は見えない。

「じゃあ、お言葉に甘えるわ。それと『勇者様』って呼べないなら、あなたのことはどう呼べば良いかしら？」

「そうだな……、特に拘りもないし。ファーストネームでもファミリーネームでも。」

「……なら、海瀬くん、って呼ばせてもらっわ。さっそくで悪いんだけど、海瀬くん。」

「ん？」

「あなた、異世界から来たのよね？」

異世界？そう呼称されると何だか不思議な感じがするな。まあ、ここからすると異世界だろうし、異世界から来たといえそうなるかな。

「なら、この世界のことはどれくらい分かるの？」

「いや、ほとんど知らないな。『イモータル』とかいう悪の組織が世界征服だかを目論んでること、ぐらいか？」

「……そう。なら、この世界で一人で行動するのは危険ね。それに、多分あなたのいた世界とは勝手も違うでしょうし。

……でも、私もすぐに王の所に戻らなきゃいけないし、お婆様ももう年だし……。」

まあな。右も左も分からんこの世界を、オレが一人で動くわけにはいかんだろうな。認めたくはないが、道端で野垂れ死にする確信がある。

しかも、オレのいた世界じゃただのカードゲームだった遊戯王が、ここじゃモンスター達が実体化して、拳げ句には殺し合いの道具にまでなっちまってんだから。ある種のカルチャーショックってやつか？

それにしても、エリアってよく考え込むな。なんか中間管理職っぽい雰囲気があるし。こりゃ苦勞人体質かな。

「それなら、『勇者様』をエンディミオン王に謁見させてみてはどうじゃ？『勇者様』なんじゃし、王や側近も邪険には扱わんじやろ

う。」

と、ここで婆さんが口を挟んだ。確かに、先ずはお偉いさんと顔合
わせしておくのも悪くないかもしれないな。

だが、その婆さんの提案に、エリアは声を荒げて反駁する。

「お婆様、それじゃ海瀬くんは『勇者様』って理由で「イモータル」
と戦わされるかも知れないのよ!？」

「いや、別にオレは構わないけど？」

「!？」

何気なく答えたオレに驚いて、エリアはオレに向かって勢いよく振
り向いた。オレの対応は予想外だったのか面食らってしまったている。

「……怖くないの? 「イモータル」との戦いが。」

エリアが心配そうにオレを見つめてくる。なんでこの子はオレの身をこんなにあじてくれるのかね。無関係なオレを巻き込みませたくないってのか？……いい子だよホント。

そりゃあ、確かに怖いさ。恐ろしいさ。なんたって化け物たちと命の綱渡りしようってんだから、怖くないわけがない。オレだって命は惜しい。まだ二十歳にもなってない。進路だって決まってる。彼女だってできてない。

それでもさ。今オレが優先すべきは、そんなもんじゃないハズなんだよ。誰かが困ってるのに、苦しんでるのに、我が身可愛さにそれに目を背けるってのは、やっぱりおかしいと思うんだよ。

自分が誰かの役に立てる、って言うなら、その誰かの為に自分の力を使わないと、勿体無いだろ？

「後悔先に立たず、ってな。やらないで後悔するより、やって後悔した方がいい。そういうタイプだな、オレは。」

「海瀬くん……。」

虚栄心とか、そんな邪な感情じゃない。これはオレの本音だった。困ってる誰かを、見捨てておけないんだよな、オレって。

真摯なオレの意志を汲んでくれたのか、エリアは一拍の間を置いた後、快く肯いてくれた。

「……そう、分かったわ。じゃあ、案内するわ。エンディミオン王のいる、《魔法都市エンディミオン》まで。」

第4頁 頼もしき守護者（後書き）

文才が欲しいです。（切実）

もつと他の作家様のようにエリアを可愛く書きたかった……。orz
私の中ではエリアは「面倒見のいいお姉さん」的ポジションなので。

今後ともよろしく願います。

第5頁

魔法都市エンディミオン（前書き）

ホントにスイマセン。（ジャンピング土下座）

いい加減デュエルシーン書けやタコって感じですよ。でも一話一話を6〜10ページくらいに纏めようとすると、っていうかデュエル書くの難s（蹴

……物語が軌道に乗り出してからが増えると思いますので、何卒よろしく。

第5頁 魔法都市エンディミオン

あれからオレ達は、《魔法族の里》を後にした。婆さん以外の里の人達は、『イモータル』の構成員たる《キングゴブリン》とその配下達によって虐殺されてしまったからだ。

もう襲撃はされないかもしれないが、それでもやはり婆さん一人を無人の里に残しておくわけにもいけないので、婆さんは《魔法都市エンディミオン》で保護してもらうことにした。

だが、当の婆さんは「長老たる私が、死んだ者達を残して里を離れる訳にはいかない。」と主張するので、オレとエリアで婆さんをなんとか諭し、《魔法都市エンディミオン》まで連れて行くことに成功した。

そしてオレ達は、《魔法都市エンディミオン》を目指して旅路を歩く

「へえ、じゃあ里に突然降った雨は、エリアが降らせたヤツだったのか。」

「ええ。《恵みの雨》を降らせたのよ。私は魔道士だし、そのくらいはできるわ。本来《恵みの雨》は、広範囲に負傷者を治癒する魔法なんだけどね。」

「エリアは昔から、水の魔法を使うことに長けておったしのお。」

他愛ない話を交わしながら、オレ達は《魔法都市エンディミオン》への道を歩いていく。歩くオレに並行して、エリアがその横を付いてくる。婆さんは里から歩いて直ぐにバテてしまったので、オレがおぶって歩いている。どうせ背負うならエリアの方が良かったのは秘密だ。

オレ達が今歩いているのは、《魔法族の里》と《魔法都市エンディミオン》を繋ぐ一本道が通る《神聖なる森》スピリチュアル・フォレストだ。本来《神聖なる森》には《魔法族の結界》が張っており、外部からの邪悪な魔物から

里を護っているらしいのだが、

「なんだって里は《キングゴブリン》達の襲撃を受けたんだ？ 結果があるなら、《キングゴブリン》達も侵入できなかったハズだろ？」

「たぶん、エンディミオン王の力が弱まっているからだわ。結果は元々、エンディミオン王が張ったものだもの。」

「エンディミオン王の力が弱まっている？」

「ええ。ひと月ほど前から、エンディミオン王はお身体が優れないの。最近は徐々に回復の兆しを見せてはいるけど……。」

なるほど、そりゃ穏やかじゃないな。王も王なりに、色々悩んだりして体調崩しちまったのか？ 悩みの種は大方、国の政治だの国の治安だのだったりするんだろうな。

「……着いたわ。」

隣を歩いていったエリアが呟いて歩を止めたので、オレもピタリと足を止める。着いた、ということは

「……でけえな。」

《神聖なる森》を抜け、眼前に広がる光景に、オレは無意識に驚嘆の声を上げていた。

オレ達はようやく、《魔法都市エンディミオン》に辿り着いたのだった。

都市の周囲をぐるりと囲んだ堅固な城壁と、天を貫く巨大な中央塔《魔法都市エンディミオン》の巨大さと相俟って、その様相は都市というより、むしろ要塞だった。

「じゃあ、行きましょ。」

そう言って、エリアは再び《魔法都市エンディミオン》への歩を進めていく。しばらく圧倒されていたオレも、歩き出したエリアを追いかける。

巨大な城門をくぐり、オレ達は《魔法都市エンディミオン》へと足を踏み入れた。途中で門番の二体の《番兵ゴーレム》から怪訝な顔をされたが、エリアが一緒にいたからか、不審なオレもすんなり通してくれた。これが世に聞く顔パスってヤツか？

都市の中を見渡してみte思ったが、《魔法都市エンディミオン》はとても賑わっていた。世界の平和が「イモータル」によって脅かされてるっていうのに、ここは明るくて活気に溢れている。

《魔法都市エンディミオン》の中央塔目指して、オレ達は都市中に張り巡らされた石畳の道路を闊歩していく。その途中、《魔法の操り人形》マジカル・マリオンネットによる人形劇や《ジェスター・ロード》ミュージシャン・キングによる曲芸、《音楽家の帝王》のストリートライブだって目撃した。

ふと、歩きながらエンディミオン王がいるという中央塔を見上げていると、とある一つの懸念が湧き上がる。前を歩いてオレを案内するエリアに、その疑念を投げかけてみる。

「……なあエリア。エンディミオン王は、ホントにオレなんかにつてくれるのか？自分で言うのもアレんだけど、オレって相当怪しいぞ？」

するとエリアは顔を僅かにオレに向けて微笑んだ。あ、ヤバ、超かわいい。

「大丈夫よ。私も一緒にエンディミオン王に謁見するから。」

そう言つて、エリアは再び前を向いた。つまりエリアの顔パスがあれば、不審なオレでもエンディミオン王への謁見を可能にできる、というわけか。おいおい、とんでもない顔パスの効果だな。……ん？待てよ？

「……エリア、お前つてもしかして偉い立場？」

「んー、そうね。一応、エンディミオン王の直属だし。私が《魔法族の里》に派遣されたのも、エンディミオン王の命だったのよ？」

……ハンパじゃない。偉いなんてレベルじゃないんじゃないか？

それからしばらく歩いていくと、ようやくオレ達は中央塔のふもと、つまり入り口に到着した。いくらなんでも城門からここまで長すぎるだろ。

「エンディミオン王に謁見したいの。通してもらえる？」

「エリア様ですか。どうぞお通りください。」

二つ返事で答え、中央塔の入り口を警護していた《魔導騎士 デイフェンダー》が避けると、その背後にあった縦長の門が独りでに開き、オレ達を出迎える。これも魔法ってヤツの成せるものなのか？

中央塔の内部は煌びやかな装飾がそこかしこに施され、厳かな雰囲気

気を醸し出していた。だがオレにはそんなものよりもっと衝撃的なものに、目を奪われていた。

この塔の内壁を伝う形で、螺旋階段が続いていたのだ。見上げてゴールを探してみるが、その先はランプ代わりの巨大な光によって見ることは叶わない。

その光景が、オレを失意のどん底へと突き落としていった。

「……………冗談だろ？」

……………とか思っただけ泣きそうになったオレの予想に反して、永遠に続いているんじゃないかと錯覚する螺旋階段を登ることなど無かった。オレのネガティブな予感が杞憂に終わってくれて、嬉しくてホントに泣きそうになった。

オレ達は《王立魔法図書館》のイラストに描かれてるあの宙に浮く

足場に乗って、一気に塔の最上部へと向かっていた。これがエレベーターのような代物なのだが、遅い代わりに壁が取っ払われてるから眼下を見下ろした時の恐怖感がハンパじゃなかった。

やがてこのゆっくり浮き上がるエレベーターもどきが、そのスピードをピタリと止めた。慣性の法則に則って、オレの体は今までシカトぶっこいていた万有引力の報復を五臓六腑でモロに受け、衝撃とともに生じた嘔吐感が、オレの肉体と精神を蝕んだ。

が、そこは紳士たるオレ。どこぞの顔芸のような愚は犯さない。辛うじて嘔吐感を喉奥へと押し込むと、エリアとともにエレベーターもどきを降りて、エンディミオン王が待つであろう『玉座の間』とかいう部屋の入り口へと辿り着いた。

ゴクリ、と生唾を飲み込み、いよいよか、と気を引き締めると、エリアが凜とした声を響かせる。

「エンディミオン王。魔道士エリア、ただいま帰還致しました。」

すると、やはりというべきか再び入り口が独りでに開き、オレ達を招き入れる。床に敷かれた玉座に続く赤いカーペットを、エリアはしずしずと、婆さんは杖をついてのそのそと、オレは緊張してギクシャクと歩く。こらそこ、笑うな。

カーペットを半分ほど歩くと、エリアが頭を下げて跪いたので、オレも慌ててそれに倣う。うう、周りに並ぶ《魔導戦士 ブレイカー》の視線が痛い……。

「……おお、エリアよ。この度はご苦労だった。」

鎧のように豪華な漆黒の法衣を纏い、玉座に鎮座するエンディミオン王、いや、《神聖魔導王 エンディミオン》は、玉座に深く腰掛けて、というよりもたれかかって静かな声を紡ぐ。覇気の薄れたその声音からは、エンディミオン王が弱っているということが容易に察せられた。

「勿体無きお言葉です。」

エンディミオン王の放った労いの言葉に、エリアは更に一段と頭を下げる。

「しかし、私が救援に駆け付けた時は既に遅く、里の者達は……。」

エリアの報告に、「なんと……。」「おのれ……。」「と驚愕と憎しみのどよめきが《魔導戦士 ブレイカー》達から囁かれ、『玉座の間』に反響する。

「皆のもの、鎮まらぬか。王の御前であるぞ。」

エンディミオン王の右隣に立っていた中年の男が、ざわめく《魔導戦士 ブレイカー》達を叱咤して黙らせる。

純白の法衣と金や宝石での煌びやかな装飾を身に着けたこの男は確か

「感謝する、《大神官デ・ザード》よ。」

《神聖魔導王 エンディミオン》へ恭しく一礼をして、《大神官デ・ザード》は再び沈黙する。場の空気が整った頃合いで、《神聖魔導王 エンディミオン》は言葉を継ぐ。

「しかし長老よ、汝だけでも無事だったことは、不幸中の幸い、というべきか。」

「まったくじゃ。私もこのお方がいなければ、今頃は死んでしまっていたじゃろう。」

「このお方、とな？その少年のことか？」

《執念深き老魔術師》の言葉の中に不可解な単語が出てきたことに訝った《神聖魔導王 エンディミオン》は、その言葉が隣で萎縮している少年へと向けられていることに気がついた。

エンディミオン王が察したことに気をよくしたのか、《執念深き老魔術師》は誇るように声のオクターブを上げる。

「そうじゃ！この少年こそ、かの『邪神』を退けた伝説の『勇者様』の、二人目なのじゃ！」

「「「！！」」」

『玉座の間』に再度どよめきが広がる。だがそれは、先のそれとは違い、驚嘆と動揺からくるものだった。

ざわめく《魔導戦士 ブレイカー》達をもう一度《大神官デ・ザード》が叱責するが、当の彼も動揺を隠せないようで、その表情は強張りを見せている。

「…………それは誠か。」

依然、静かな声でエンディミオン王は婆さんに問いかける。…………アレ、なんかオレ要らなくないか？当人に訊かずに婆さんに訊くのかよ。…………でも緊張して声出ないかもしれないし、そっちの方がありがたいかも。

問われた婆さんは、大仰に首を縦に振って肯定の意を差し示す。すると玉座に座り直すエンディミオン王に、デ・ザードが何やら耳打ちをする。

静寂に包まれた『玉座の間』には、小声の耳打ちが途切れ途切れに聞こえてくる。…………おいおい、「本物かどうか」だの「審議」だのと、なんか不穏な雰囲気を感じるんだが。

そして、その予感は的中することとなる。これこそ杞憂で終わってほしかったよ。

「…………少年。」

「…………ナンデゴザイマスデショウ。」

「今から汝には、ある者と決闘をしてもらう。汝が誠の『勇者』たる証である『強さ』を、我に見せてほしい。」

「…」

「汝の力を、『勇者』の力を、我は一目見ておきたいのだ。…………やってくれるな？」

だが断る。…………なんて言えない。言えるわけがない。だって怖すぎるって、この空気。みんなオレのこと見てるしさ、空気読まずに断ったら何されるか分かったもんじゃないって。拷問か幽閉か。最悪打ち首獄門か絞首刑だって絶対。

チラリ、ともう一度エンディミオン王を盗み見る。……うぐ、無言の圧力がハンパじゃない。やってくれるな？ じゃないって。やれ、って意味だろ？ そうなんだろう？

ああ分かったよ。やるよ、やってやろうじゃん。どこからでも煮るなり焼くなり好きに掛かってこい！ ってパニックって台詞が混濁してアバババババ。

「……ツツシンデ、ヤラセテイタダキマス。」

……言っちゃった。言っちゃったよ、オレ。これが階級制度。これがヒエラルキー。上からの圧力ってやつか。君主制の恐ろしさに戦慄を覚えるばかりだぜコンチクショ！。

しかし、と考え直してみると、コレは不審者極まりないオレをこの場にいる全員に信用させるチャンスなんじゃないか？ あわよくば、エンディミオン王からの全面的なバックアップも期待できグヘヘ。

乗り気になってきたテンションに身を任せようとした、その刹那。

《キングゴブリン》が黒い灰となって崩れ落ちた光景が、フラッシュ

ユバックする。

……その記憶が、オレの溢れ出す感情を押し戻す。あの時は《キングゴブリン》、つまり罪を贖うべき敵だった。だが、今回はどうなんだ？ 裁くべきではない相手の命を、奪うことにならないのか？

「案ずるな。決闘で命を奪い合うは『イモータル』の呪術『闇の決闘』によつてのみ。つまり、汝の相手との決闘で互いに命の危機が迫りはせぬ。」

「！？」

一人で悶々と悩んでいた最中、突然エンディミオン王が誰に言うでもなく告げる。だがオレには、その言葉がオレへと向けられたことを理解した。

「うげっ！ コイツオレの心読め……っ！？」

無意識に、オレはエンディミオン王へと悲鳴のような叫び声を上げていた。この言動が周囲の輦蹙を買ったようで、「無礼者！」「王

に対してなんたる口の利き方を！」などと非難と怒声が投げつけられる。そんなの気にしていられるか！こっちは思考を読まれたんだぞ思考を！

ブライバシーの侵害じゃないかオイ！？エンディミオン王の理不尽さに、思わず張り上げそうになる声を、寸前で押し殺す。だが、エンディミオン王にはオレの思考が読まれていると思うとゾツとする。この思考も読まれてそうだ。

そう考えるとキリが無い。とりあえずこのややこしい堂々巡りなイタチゴッコ理論は中断するでしょう。

『闇の決闘』、ねえ。名前からして、原作の『闇のゲーム』みたいな代物か。それが敵の特権ってのは些か怖いが、無闇に命を奪うことが無いのはありがたいな。

「で、オレは誰と戦えばいいんでしょうか。」

テキトーな敬語だったから、またデ・ザードやブレイカー達の顰蹙を買ったり、とうとうエンディミオン王の逆鱗に触れたりしたんじゃないかと内心ビクビクしてたが、そんなことは無かった。

問われて、エンディミオン王は、ふむ、と一瞬考える仕草をする。
まさかブレイカー百人抜きとか言わないよな？オレの精神力が持たないっての。

「……生半可な者が相手をすれば、勇者殿にも申し訳が立たんだろう。ならば我も、誠意をもって相手を選ぼう。」

いや、まあ誰でも良いんだけど。てゆうかむしろ弱い相手の方が気が楽かも

「エリア、汝が相手をせよ。」

………は？

第5頁

魔法都市エンディミオン（後書き）

ようやく主人公の第二戦目、作者的にも第二戦目に入ります。

デュエルシーンの頻度はだいたい2話に1回くらいで行こうかなど。
物語が軌道に乗ったら3話に2回くらいかも。

次回もどうぞよろしくお願いします。

第6頁 逆巻くエリア（前書き）

タイトルと内容は殆ど関係ないですね。《逆巻くエリア》のカードは出ませんし、エリアがいきなり《逆巻くエリア》になるなんて事ありません。ただ、それくらい激しくなってますけど。（多分）

ようやく真面目に書くデュエルなので、自信は無いです。（汗）

第6頁 逆巻くエリア

どうしてこうなった。ご乱心のエンディミオン王から発せられたトンチキな勅命から数分間、今の今までオレは前途の台詞を何度も何度も脳内でリピートさせていた。

「海瀬くん、女だからって手加減しないでよね？」

ブレイカーの一人が持ってきたデュエルディスクっぽいのを装着して、エリアは身構える。あーもう何でこの子もこんなにノリノリなんだよオイ。コッチは下手すりゃ幽閉か極刑がかかってるかも知れないんだからさ。

現状を三行で簡単に説明しよう。
雰囲気の流れに身を任せたら、
結果的に王の命令に従う形に。
相手のエリアは超ノリノリ。

……ホント、どうしてこうなった。本日何度目か分からないボヤキを放つ。これが流れの恐ろしさか。空気を読むって大事なことだけ

ど、下手したらこんな地雷踏むハメになるんだよな。

しかしこのまま己の不幸を嘆いても仕方ない。とりあえずデュエルしないと話は進まないんだしさ。意を決し、オレもデュエルディスクを構えて臨戦態勢を取る。

すると、

ガチンッ！

と金属がぶつかり合ったような音が『玉座の間』に響き渡る。この音、どっかで聴いたことがあるような……。

「あ、あの時と同じじゃ……。」「

遠巻きから見ている婆さんが、その老体を戦慄かせている。それとともに、周囲の取り巻きも騒めきだす。

あの時？ ああ、そういえば《キングゴブリン》とのデュエルの直前にも、こうしてデュエルディスクにくっ付いてる弾倉が回転したん

だっけ。つーかコレ、ホントに何なんだ？

「へえ、変わった決闘具を付けてるのね。」

今度は対峙するエリアが、物珍しそうにオレのデュエルディスクを眺めている。かくいうエリアは遊戯王ゴッズとかにある一般的なデュエルディスクに水色のカラーリングの可愛いものだ。

あと、こつちの世界じゃデュエルディスクは決闘具というのか。せ、センスねえ……。

「では、始めよ。」

開始をエンデイミオン王が命じ、開戦を告げる銅鑼が叩かれた。そして更に開戦の合図を一押しするのは、オレとエリアの号令だ。

「デュエル！！」

海瀬 総一	LP8000
エリア	LP8000

「オレのターン、ドロー！」

デュエルが開始され、最初のターンの口火を切るのは、オレの宣言とカードのドローだ。

一応言っておくが、デュエルディスクを使うデュエルに於いて、先手と後手を決定するのはデュエルディスクだ。ターンランプという両者のうちどちらかのデュエルディスクに灯るランプがあり、その光が灯ったプレイヤーがターンを開始する。

つまり、別にオレがかの有名な『先に言っただ方が先行』なる不公平かつ波乱を呼ぶ原作ルールを公使したわけでは断じて無い。

だから紳士たるオレはレディファーストという女尊男卑な慣例に倣ってエリアに先行を譲ろうと思っていたのだが、このポンコツデュエルディスクがターンランプなんて灯しやがったもんだから、オレのジェントルマンへの道は早くも閉ざされちゃった。

掻い摘んで言うと、オレもこのポンコツの被害者なんだよ。頼むか

ら理解してくれ。そしてオレを恨まないでくれ怖いから。

それはさておき、現状を把握しておこう。エリアのデッキが何なのかは分からんが、オレのデッキは現実のとは違っでどうやら岩石族デッキみたいだし、どこまで戦えるか……っで、

「はあっ!？」

あまりの出来事に、オレは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。うぐ、周りも奇異なものを見る目でオレを見てくる……。やめろ、そんな目でオレを見るな……!

お、落ち着けオレ。落ち着いて素数を数えるんだ。クールダウンだクールダウン。……よし、現状を再認識しよう。

一言で言えば、オレの手札には岩石族モンスターが一枚も無い。といてもモンスターはいるから魔法・罠だけで事故つてるとか、そんなんでもない。

喩えて言うなら、『デッキの中身が丸々すり替えられた』ってやつだ。しかし、まったく戦えないデッキ、というわけでもないから、何らかの陰謀ではないと思う。

「オレは《アックス・ドラゴニユート》を召喚する！」

《アックス・ドラゴニユート》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1200

このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

身の丈ほどの斧を携えた、漆黒の竜人が召喚される。おお、カッコいい。

「こ、この前とデッキが違う!？」

婆さんもやっぱり気付いたか。戸惑ってるのはこっちも同じだったの。誰か説明プリーズ。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ。」

海瀬 総一 LP8000

手札…4

モンスター…斧ドラゴ（攻）

魔法・罠…伏せ1

さて、序盤は慎重に動きつつ、攻める準備を整える。エリアがどんなデッキでどんな動きをするか分からない以上、様子を見ないとな。

「私のターン、ドロー！」

うーん、と唸って、エリアは手札を眺めながら指を顎に当てて考える仕草をする。可愛くてデュエルどころじゃ無くなってきそうだ。

「私はモンスターとカードを一枚ずつセットして、ターン終了よ。」

エリア LP8000

手札… 4

モンスター… セット 1

魔法・罠… 伏せ 1

あれ、意外と動かなかったな。まあ序盤だし、そんなもんか。いきなり派手に動くのも考えものだし。

「オレのターン、ドロー。」

相手が守勢に回ったなら、こちらは攻勢に出たほうが吉か？だとすると、オレの（今の）デッキの真骨頂だな。

「オレはモンスターを一体セットして、バトルフェイズに入る！《アックス・ドラゴニユート》で、セットモンスターに攻撃！ジェノサイドブレイバー！」

ファンが聞いたなら怒りそうな攻撃名だが、ここは許してくれ。流石に本家のような喋り方はしない。そこまでする度胸も、あの神ボイスも持ち合わせじゃない。

エリアの伏せカードも気になるが、どうせオレも索敵と牽制が狙いなんだ。罠なら使ってもらったほうが後々ありがたい。

ゴウ、と振り回された戦斧が、エリアの伏せたモンスターに襲いかり、真一文字に振り抜いた。手応えは、ある！

一閃が駆け抜けて、エリアのモンスターを両断した。真つ二つとなったエリアのモンスターは、粉微塵に砕け散って霧散する。

うしー！と喝采するオレを余所に、攻撃した《アックス・ドラゴニート》は疲弊したのか、斧を杖代わりに突いてその場に立ち尽くした。

《アックス・ドラゴニート》は攻撃したら守備表示になるという所謂デメリットアタッカーだが、同系列のヤツらに比べると次のターンにまた攻勢に転じれる。つまり、一発一発の爆発力は無い代わりに、使いやすくなっているのだ。

「とりあえず、初手はオレの方に戦況が傾いてきたか？」

「あら、そつでも無いわよ？」

オレに向けて、エリアはフツと笑みを漏らす。ちよつとちよつと、何ですかエリアさん。その不敵な、というよりコケティッシュな微笑みは。悩殺されそうなんです。

「この瞬間、破壊された《スクリーチ》の効果が発動するわ!」

「……え?」

《スクリーチ》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 爬虫類族 / 攻1500 / 守400

このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキから水属性モンスター2体を選択して墓地へ送る。

突如として青緑色の不気味なモンスターが墓地から半透明な姿で現れ、エリアの山札からカードを二枚吸い取った。まるでバキュームカーだな。

カードを飲み込んで満足したのか、腹を更に一段と膨らませた《スクリーチ》は、再び墓地へと消えていった。

……って、こらこらエリア。女の子がそんな気持ち悪いモンスター使っちゃダメだろ。女の子ならもっと可愛いカードを使いなさい。

「うーん……、確かに見た目はアレなんだけど、この子なかなか便利なのよ？私のデッキでは重要なモンスターでもあるし。」

「利便性の高さは認めるが、オレとしては何とも複雑な心境だと言わざるをえないな。……ま、オレはこのままターンエンドだ。」

相手の戦術の展開を後押ししてしまう結果となってしまうたが、してしまったものは仕方がない。後悔の念はどれだけ抱いても、増大はしても払拭はできないのだから。要は気持ちの切り替えだ。

海瀬 総一 LP8000

手札…4

モンスター…斧ドラゴ（守）、セット1

魔法・罠…伏せ1

「私のターン、ドロー！」

しかし、エリアが墓地に送ったカードは何なんだ？水属性ということとは、やはり《黄泉ガエル》か？

《黄泉ガエル》

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 100 / 守 100

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罫カードが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

……いや、多分違うな。今、エリアのフィールドには魔法・罫カードが一枚伏せられているから、《黄泉ガエル》を特殊召喚できない。後々のターンまでの下準備、という可能性までは流石に否定できないが。アレは無意味に墓地に送っても便利なモンスターだからな。

「まず私は、伏せていた永続罫《正統なる血統》を発動するわ！」

《正統なる血統》

永続罫

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

「《正統なる血統》！？」

思わずオレは声を張り上げていた。

《正統なる血統》。それは自分の墓地のあらゆる通常モンスターを蘇生させる強力な罫カードであり、通常モンスターの長所の一つに名を連ねるほど、汎用性の高いサポートカードなのである。

その為に《スクリーチ》で水属性モンスターを落とす……まさか、エリアが蘇らせるモンスターは……！！

「《ゴギガ・ガガギゴ》を墓地から特殊召喚するわ！」

《ゴギガ・ガガギゴ》

通常モンスター

星8 / 水属性 / 爬虫類族 / 攻2950 / 守2800

既に精神は崩壊し、肉体は更なるパワーを求めて暴走する。
その姿にかつての面影はない…。

巨大な怪物が、エリアの足元から溢れ出る光とともに、咆哮を上げて顕現した。全高は優に10メートルはあるつかというその圧倒的な存在感は、見るものを否応なく、本能的に萎縮させる。

てか、いきなりボスキャラ出されてもさ、こっちは対処に困るっつの！

「さらに、私は《ライオ・アリゲーター》を召喚！」

《ライオ・アリゲーター》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 爬虫類族 / 攻1900 / 守200

自分フィールド上にこのカード以外の爬虫類族モンスターが存在する場合、

自分フィールド上に存在する爬虫類族モンスターが

守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

エリアは止まらない。《ゴギガ・ガガギゴ》に続いて召喚したのは、ライオンのような鬣を生やした二足歩行の鰐のようなモンスターだった。

「バトル！《ライオ・アリゲーター》で《アックス・ドラゴニユート》を攻撃！」

大口を開けた《ライオ・アリゲーター》は突進し、跪いたまま斧を構えて防御の姿勢を取る《アックス・ドラゴニユート》へと踊りかかった。

無数に並ぶナイフのような牙を突き刺して《アックス・ドラゴニ
ート》を捕らえ、その自由を封じ込めると、相手が動けないのをい
いことに、そのまま《ライオ・アリゲーター》は横にぐるぐると目
まぐるしい速さできりもみ回転する。俗に言う、『デスロール』と
いうやつだ。

無論、この猛攻に耐えきれはるはずもなく、《アックス・ドラゴニ
ート》は成す術もなく破壊される。

「ちっ……！」

海瀬 総一 LP8000 7300

破壊の衝撃が、オレのライフポイントを削る。《ライオ・アリゲ
ーター》の効果が適用されている今となつては、最早オレに守備表示
で場を凌ぐ術は無い。

「更に《ゴギガ・ガガギゴ》でセットモンスターに攻撃！」

《ゴギガ・ガガギゴ》はゆらりとその巨腕を振り上げ、狂気の眼差
しは眼下に潜むモンスターを一点に凝視する。

狙いを定めようとせず、ただ腕を力任せに振り下ろす。

ドガンッ！！《ゴギガ・ガガギゴ》の一撃が、オレの眼前に叩き込まれた。その圧倒的な破壊力は大地を激震させ、周囲一帯に衝撃を走らせる！

「ぐ、ううっ！！」

海瀬 総一 LP7300 5450

巻き上がる砂塵が、オレの視界を奪い、不可視の激しい衝撃を迸らせる。痛み自体は無いが、臨場感と迫力が半端ではない。本当に痛みがあるようにさえ錯覚させるほどに。

しかし、だからといって手を拱いているわけにもいかないし、そうする気も毛頭ない！

「エリア！こつちも戦闘で破壊された後のアフターケアはバッチリだ！破壊された《仮面竜》の効果を発動する！」

マスクド・ドラゴン
《仮面竜》

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、

デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

その後デッキをシャッフルする。

「キャストオフ、ってな！オレはデッキから《デルタフライ》を特殊召喚する！」

息絶えた《仮面竜》は、新たなドラゴンを召喚する。呼び出したドラゴンは緑色の細長い小柄な体躯に、純白の白い羽を羽ばたかせる。見た目は少々頼りないが、攻撃力は1500とそこそこある方さ。

それにしても、この世界ってシンクロの概念が既にあっただんな。岩石族はチューナーがいないから今の今まで分からなかった。これだとGXパロの時みたいにチューナーを召喚してシンクロして注目集めるぜ的な事は望めないな。

《デルタフライ》

効果モンスター・チューナー

星3 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1500 / 守 900

1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してレベルを1つ上げる事ができる。

「む、チューナーを残されたわね……。私はカードを1枚伏せて、ターンを終了するわ。」

エリア LP 8000

手札：3

モンスター：ゴギガ（攻）、ライオ（攻）

魔法・罠：血統、伏せ1

「オレのターン、ドロー。」

さて、どうするか。まさかエリアがここまで強敵だったとは。ある程度の覚悟はしていたが、その予想を遥かに上回ってきた。

だがしかし、オレにも沽券だの意地だのがある。まがりなりにも『

勇者様』が女の子一人に圧倒的戦力差でタコられて負けましたじゃ
シャレにならん。

「オレは手札から魔法カード《洗脳 ブレイン・コントロール》を
発動し、《ライオ・アリゲーター》のコントロールを得る！」

海瀬 総一 LP5450 4650

《洗脳 ブレイン・コントロール》

通常魔法

800ライフポイントを払い、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して
発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターのコント
ロールを得る。

発動した《洗脳 ブレイン・コントロール》のカードの立体映像か
ら眩い稲妻が迸り、対峙する《ライオ・アリゲーター》へと直撃す
る。すると突然の四肢と頭部が力無くダラリと垂れ下がり、まるで
指示をされない操り人形のように動かなくなった。

武藤遊戯の使用したカードにしては、随分と遅くカード化したんだ

よな、これ。

「さらに《デルタフライ》の効果により、コントロールを得た《ライオ・アリゲーター》のレベルを1つ上げる！」

《ライオ・アリゲーター》のレベルが4から1つ上がり、5になる。これでレベルの合計は、8。ちなみに補足しておくと、《デルタフライ》の効果は対象がフィールド上に表側表示で存在する限り、レベルは永続的に上がったままなんだとさ。

「来る！」

「さあお待ちかね、レッツパーティーだ！
レベル5となった《ライオ・アリゲーター》に、レベル3の《デルタフライ》をチューニング！」

《デルタフライ》が三度その双翼を羽ばたかせ、旋風を巻き起こす。それは三つの別々の円環となって《ライオ・アリゲーター》を潜らせる。

次第に《ライオ・アリゲーター》の輪郭が発光し、体内に灯る5つ

の星が浮かび上がると、それを貫くように一筋の閃光が駆け抜けた。

「荒廃せし崩落の巨竜が、数多の残滓を糧として今、目覚める！」

「シンクロ召喚！再起せよ！」

「《スクラップ・ドラゴン》！」

天を突く巨大な光の柱を内側から薙いで、深紅の両眼を灯す巨竜が羽ばたき、上空へと飛翔して体の各部から起動を合図する汽笛のようになんぞを吐き出す。

朽ち果てた無数の残骸からなるその姿は、雄々しき巨体と存在感に見窄らしさと寂寥感を匂わせた。

……それにしても、我ながら何とも厨二くさい台詞を吐いたもんだ。しかし、現実じゃこんな事できないからな。こっちの世界なら台詞を言っても違和感も無いだろうし、言えるだけ言っておこう。

実際、今のオレに変なものを見る目を向けてくる不屈き者はいない。むしろ、驚嘆と賞賛の眼差しとどよめきを感じる。ふはは、もっと

讚えるがいい。

「……スゴい。シンクロ召喚を使えるなんて。海瀬くん、流石ね。」

いやはやそれほどでも。やっぱり周りの百のモブの賞賛より、一人のエリアの尊敬の方が何百倍も嬉しいってものだ。

「まあな。だがオレのターンはこれからだぜ？オレはモンスターを1体セット！」

そして！大仰に高々と腕を振り上げて、上空で滞空する《スクラップ・ドラゴン》を真っ直ぐ指差し、声高らかにオレは叫ぶ。

「オレの今セットしたモンスターと《正統なる血統》を選択し、《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動する！」

「！？」

「《スクラップ・ドラゴン》は1ターンに1度、自分と相手のカードを1枚ずつ選択し、破壊する！」

《スクラップ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動することができる。選択したカードを破壊する。
このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

「クラッシュャー・インパクト！」

《スクラップ・ドラゴン》の羽ばたきが一陣の突風を巻き起こす。
それはフィールドを蹂躞し、オレとエリアへ襲いかかる。

突風は竜巻となって二人のカードを1枚ずつ巻き上げて、中空で粉々に破壊する。

「そして《正統なる血統》がフィールド上に存在しなくなった事で、対象となっていた《ゴギガ・ガガギゴ》は破壊される！」

「！！！」

《正統なる血統》。それは通常モンスターを強力にサポートするカードであるが、同時にそれはモンスターに弱点を生む。

蘇生したモンスターは《正統なる血統》と一心同体となり、一方が消えればもう一方も消えてしまうのだ。これは当然も例外ではなく、ゴギガ・ガガギゴ粉雪のように白銀の粒子となって消え去った。

「……どうして、《ゴギガ・ガガギゴ》ではなく《正統なる血統》を狙ったの？」

「いやな。ただその伏せカードが《我が身を盾に》の類のカードかと警戒してな。」

《我が身を盾に》
速攻魔法

1500ライフポイントを払って発動する。
相手が発動した「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つカードの発動を無効にし破壊する。

「《我が身を盾に》は相手からのモンスターの破壊しか守れない。つまり魔法・罫の破壊も、それによって自分のモンスターが破壊される事も防げないからな。」

「……慎重なのね。」

「臆病者と貶すやつもいるけどな。
バトル！《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！
クラッシュャー・ストリーム！」

《スクラップ・ドラゴン》の口が開き、その喉奥から覗く巨大な管から、猛烈な勢いでドス黒い超科学スモッグの塊が放たれる。オイオイオイ、ヤバいんじゃないのか。

地面に叩き込まれたスモッグの塊は弾けると、周囲に黒い霧をバラまいた。あくまでも立体映像による疑似体感なので、濛々と立ち込めるスモッグといっても視覚こそ遮断されるが、息苦しさなどの身体的な害は無いはずである。それでも、人として、道徳的に気懸か

りにはなってしまうのだ。

やがて多量のスモッグが晴れると、中からエリアが無傷で無事な姿を現した。しかし、ローブの袖で隠すその表情は、不快に顰められていた。

「……海瀬くん。」

エリア LP 8000 5200

……あ、ヤバい。ちょっと怒ってる。好感度が落ちるのは困る。こ
こは素直に謝るが得策とみた。

「……スマン。他意は無いんだ。……このままターンを終了する。」

海瀬 総一 LP 4650

手札…3

モンスター…屑鉄竜（攻）

魔法・罠…伏せ1

「ふう……、ま、反省してるみたいだし、許してあげるわ。
私のターン、ドロー！」

お許しが出たので、オレの肩にのし掛かっていた懸念や焦燥が一気に降りて、体が楽になった。これが安堵する、ってやつかしみじみ実感する。

だが、一難去ってまた一難、と先人は言った。まさしくその通りだと、これもしみじみと実感、というよりひしひしと痛感する。

「手札から魔法カード《ヴァイパー・リボーン》を発動するわ！」

《ヴァイパー・リボーン》

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスターが爬虫類族モンスターのみの場合に、

チューナー以外の自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

うげ、また蘇生サポートか。蘇生する通常モンスターは勿論、アイツだ。次から次へと、ホントに勘弁してくれよ。

「《ゴギガ・ガガギゴ》を再び墓地から特殊召喚するわ！」

強大なモンスターが、再びフィールド上に舞い戻る。エンドフェイズ時に再び破壊される運命だというのに、その迫力はまったく色褪せない。

やはり、エリアのデッキは《ゴギガ・ガガギゴ》を通常モンスターや爬虫類族サポートで蘇生しまくってビートする「ハイビート」か。こゝこれは《ゴギガ・ガガギゴ》から過労死のにほひがプンプンする……！

「ラピユタは滅びぬ、何度でも蘇るさ、ってやつか……。」

「？何の事が分からないけど、バトルフェイズに入るわ！
《ゴギガ・ガガギゴ》で《スクラップ・ドラゴン》に攻撃！」

《ゴギガ・ガガギゴ》が再び腕を振り上げる。標的は無論、己の行く手を阻んで眼前に滞空する《スクラップ・ドラゴン》である。

振り下ろされた巨腕が強靱な一撃となつて《スクラップ・ドラゴン》へと叩き込まれ、屑鉄で構成されたその背部を粉碎し、胸部まで貫通する。

巨軀に穿たれた大穴を中心に、《スクラップ・ドラゴン》の全身に亀裂が走り

大爆発を、起こした。

「ぐっ……！」

海瀬 総一 LP 4650 4500

頭上で起きた爆発は漆黒の粉塵を一面の眼下へと撒き散らし、オレの視界を覆い尽くす。その密度の濃さは、オレにあるはずのない息苦しささえ覚えさせる。

まさか攻撃力2800を誇る《スクラップ・ドラゴン》が1ターンで瞬殺されるとは、まったく予期していなかった。

「私はこのままターンエンドよ。そしてエンドフェイズに《ヴァイパー・リボーン》のデメリットで、特殊召喚した《ゴギガ・ガガギゴ》は破壊されるわ。」

咆哮する《ゴギガ・ガガギゴ》の巨体が塵となり、果てる。舞い散る塵が、まるで粉雪のように見える。

エリア LP5200

手札…3

モンスター…なし

魔法・罫…伏せ1

「オレのターン、ドロー！」

さて、どうすっかな。《ゴギガ・ガガギゴ》は破壊されたが、エリアのデッキは《ゴギガ・ガガギゴ》を中心に据えたデッキ。まだまだ蘇生させる方法は残っているはずだ。

「オレは《ミラーージュ・ドラゴン》を召喚する！」

《ミラーージュ・ドラゴン》

効果モンスター

星4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1600 / 守 600

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
相手はバトルフェイズに罠カードを発動する事はできない。

オレの背後から新たに、その長い体をうねらせる飛龍が召喚される。
攻撃力も効果も特筆するほど強力じゃないが、この際仕方ない。

でもコイツ、結構敬遠されてるモンスターだが、まだまだ利用価値
はあると思うんだよな。攻撃反応型罠を封じる以外にも、バトルフ
ェイズで発動した自分のカードをカウンターされる事も減らせるし。

とはいえ、速攻魔法やフリーチェインのカードなどの抜け穴は多い。
特に、また《正統なる血統》なんて使われたらたまったもんじゃない。
い。ならば、打てる策は打っておく。

「そしてオレは手札から魔法カード《スタンピング・クラッシュ》
を発動する！」

《スタンピング・クラッシュ》

通常魔法

自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊し、そのコントローラーに500ポイントのダメージを与える。

「エリアのセットカードを破壊して、お前に500ポイントのダメージを与える！」

どこからともなく現れた竜の後ろ足が、エリアの伏せたカードを容易く踏み砕く。粉々にされたエリアのカードの残滓が、彼女へと飛び散る。

「……っ！セットカードは《我が身を盾に》よ。」

エリア LP 5200 4700

……当たってたんだな、オレの推理。少し感激するが、今はそれどころではない。

「バトル！《ミラージュ・ドラゴン》で相手プレイヤーにダイレクトアタック！

ミラージュ・バースト！」

《ミラージュ・ドラゴン》が放った金色の閃光がエリア目掛けて駆け抜けて、その一閃がエリアを呑み込んだ。

「きゃ………！」

エリア LP 4700 3100

小さな悲鳴を上げ、エリアがたじろいだ。ぐ、やっぱり心が痛いな……。すまん、ここは勘弁してくれ。

「オレはこのままターンを終了する！」

海瀬 総一 LP 4500

手札…2

モンスター…蜃気楼龍（攻）

魔法・罨…伏せ1

「私のターン、ドロー！」

端から見れば拮抗している勝負に見えるかもしれないが、実際はオレの方が幾分か不利だろうな。

何しろエリアは、効果を持たないが高い攻撃力の《ゴギガ・ガガギゴ》を何度も蘇生して殴ってくる。こり押しされて、オレの方がジリ貧になってくるのは明白だ。

「まずは手札から魔法カード《強欲なウツボ》を発動！」

《強欲なウツボ》

通常魔法

自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「手札の《ゴギガ・ガガギゴ》と《ギガ・ガガギゴ》をデッキに戻して、カードを3枚ドロ―！」

手札交換カードか。しかし、よく手札に上級モンスターの《ギガ・ガガギゴ》と《ゴギガ・ガガギゴ》がいたな。やっぱり上級モンスターに頼ったデッキってのは手札事故が付き物か。

ドロ―したカードを一瞥して、エリアは「よし！」と喝采する。心底嬉しそうに微笑むその表情にノックアウトされそうだ。

「そして手札を1枚コストに、魔法カード《スネーク・レイン》を発動！」

《スネーク・レイン》

通常魔法

手札を1枚捨てる。

自分のデッキから爬虫類族モンスター4体を選択し墓地に送る。

「やっぱり入っていたか《スネーク・レイン》！爬虫類じゃむしろ採用されないほうが珍しいくらい強力なサポートカードだからな。入っているのは予想していたが……」。

「デッキから《ゴギガ・ガガギゴ》1枚と《ギガ・ガガギゴ》1枚と《ライオ・アリゲーター》2枚を墓地へ！」

エリアのデッキから、爬虫類族モンスターが次々と墓地へと送られる。送られたカードの内の《ギガ・ガガギゴ》と《ゴギガ・ガガギゴ》は、十中八九《強欲なウツボ》でデッキに戻したのだろう。

つまり、エリアのデッキでは《強欲なウツボ》は手札事故の軽減とともに、手札にきた爬虫類族モンスターを《スネーク・レイン》でデッキから墓地に落とすためにデッキに戻す役割を兼ねているわけか。

「更に装備魔法《継承の印》を発動！」

《継承の印》

装備魔法

自分の墓地に同名モンスターカードが3枚存在する時に発動することができる。

そのモンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。

やっぱり《継承の印》は入っていたか……っ！アレと《スネーク・レイン》のコンボは単純ながら強力だから……。

「《ゴギガ・ガガギゴ》を選択し、墓地より特殊召喚！」

蘇る。何度でも。死してもなお、《ゴギガ・ガガギゴ》は再びフィールドへと舞い戻り、弱者を破壊し、蹂躪する。さながらそれは、嵐のように。

強大な怪物が、再びフィールドへと顕現した。

なるほど、一体目と二体目は《スクリーチ》で落としておいで、残った三体目は手札に来ようがデッキに在ろうが《スネーク・

レイン』で墓地に落とす。という算段だったのか。

なかなか上手く考えたもんだな。……いやいや、感心している場合ではない。正直、ピンチだ。

「更に手札から魔法カード《思い出のブランコ》を発動！」

《思い出のブランコ》

通常魔法

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

つここにきて、更に蘇生カードか……！オレの額から頬を、一筋の冷や汗が伝う。生存本能からの危機察知能力が、さっきから警鐘を早鐘のようにガンガンと鳴らしている。

「二体目の《ゴギガ・ガガギゴ》を特殊召喚！」

更なる怪物が、その巨体を墓地より這い出して、エリアの脇に聳え立つ。しかも、今度は二体目が。

《思い出のブランコ》で特殊召喚したモンスターには、エンドフェイズ時に自壊を迎えるというデメリットがある。だが、この《ゴギガ・ガガギゴ》の存在感が、そんなデメリットなど些細な事のように思わせてくる。

……いや、ゴギガ・ガガギゴ実際問題は墓地にいた方が直ぐに蘇生できてありがたいから、破壊されてもホントにデメリットは些細な事なんだけどな。

「バトル！一体目の《ゴギガ・ガガギゴ》で《ミラージュ・ドラゴン》に攻撃！」

《ゴギガ・ガガギゴ》は後方へと巨腕を長く伸ばし、その先でギリギリと固めた握り拳を、《ミラージュ・ドラゴン》へと叩き込む。

その渾身の右ストレートが凄まじい衝撃波と爆風を生み、それが《ミラージュ・ドラゴン》を爆砕し、背後に立つオレにも襲いかかる！

「ぐう、わっ！」

海瀬 総一 LP 4500 3150

「更に、二体目の《ゴギガ・ガガギゴ》で海瀬くんにダイレクトアタック！」

一撃目の衝撃の余韻が残る最中、二体目の《ゴギガ・ガガギゴ》が脚を踏み出し、腕を振り上げ、咆哮を上げ、襲来する。しかも、今度はオレに攻撃を防ぐ手立てが、無い。

鉄槌がごとき巨腕がオレを目掛けてブチ込まれ、再び衝撃と爆風が、激震とともにオレを直撃する。

「ぐわああっ！」

海瀬 総一 LP 3150 200

……コラそこ。大人げなく叫びまくって恥ずかしいとか言うな。オレだって恥ずかしいが、ホントに臨場感がハンパじゃないんだって。3D映画を初見で、しかも0距離で観たらこんなだと思っよ、みんな。しかもオレの場合、モンスターがオレ目掛けて襲い掛かって

くるわけだからもつと怖い。

それはさておき、もう残りライフは200と風前の灯火。しかもエリアのフィールドには、攻撃力2950の《ゴギガ・ガガギゴ》がいる。

……これって、ヤバいんじゃないか？

「私はこのままターンエンドよ。そして、《思い出のブランコ》で特殊召喚した《ゴギガ・ガガギゴ》は破壊されるわ。」

最早何度目だろう、《ゴギガ・ガガギゴ》が墓地へ送られるのは。フィールドと墓地を何回往復したんだ？誰か数えてくれ。

エリア LP3100

手札…0

モンスター…ゴギガ（攻）

魔法・罠…継承の印

「……海瀬くん。」

「ん？」

「もう、無理よ。海瀬くんは良く頑張ったわ。」

「……。」

「だから、サレンダーしてもいいのよ？」

エリアが心苦しそうな表情で、オレに語りかけてくる。エリアとしては、もうこんなデュエルは止めたいんだろうな。ダメージが無いとはいえ。

まあ確かに、エリアの手札と伏せカードはもう無いが、それでもオレが負ける確率は、依然高いだろうな。周囲のモブキャラどもからもそんな囁きが聞こえてくるし。

だが、負ける確率は100%になっちゃいない。それだけでも、十分さ。それだけでも、デュエリストは戦える。

「まさか。ここはアニメのキャラなら燃えるところだろ。ここ一番で

逆転したら、かつこよさも一押ししてもんだ。」

「……？」

「まあ、アニメだの何だの言っても分からないか。
オレのターン、ドロー！」

状況自体を突破する手立てはある。後は、その突破口をこじ開けて、一気に勝利まで突っ走るだけだ。その為のキーカードを、勝利への最後のピースを、引く！

「
」

さて、残り31枚のデッキの中から、キーカードを引く確率は、一体何%なんだろうな。

だが、非現実の世界では、その不可能ともいえるほどの天文学的確率を全て覆すんだよな。

「 来たか。」

だから、こんな神引きを、チートドロを、土壇場で発揮する。まさか、遊星と同じ事ができるとは夢にも思ってたな。現実ではこうも行かないのが何とも辛い。

「スタンバイフェイズ時に、墓地の《ミンゲイドラゴン》の効果が発動！コイツをオレのフィールド上に特殊召喚する！」

《ミンゲイドラゴン》

効果モンスター

星2/地属性/ドラゴン族/攻 400/守 200

ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、

このモンスター1体で2体分のリリースとする事ができる。

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場合には発動できない。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

細長い首と尻尾をくねらせ、丸い胴体から伸びる双翼を羽ばたかせ、茶色の奇妙なドラゴンが、オレの墓地から飛び出した。そういえば、何でコイツの名前って《トーテムドラゴン》じゃないんだろっな。

「ど、どうして……！？いつの間に《ミンゲイドラゴン》を……！？」

おお、エリアが困惑している。お約束のリアクションと可愛い仕草に、オレの心は大満足だ。

「《スクラップ・ドラゴン》だ。あの時オレが破壊したセットモンスターは、《ミンゲイドラゴン》だったのさ。」

コイツは墓地に送ってもなんら支障は無いからな。除外されるのはちょっと痛いかもしれないが。

「更に手札より魔法カード《アースクエイク》を発動！この効果により、全フィールド上のモンスターは守備表示となる！」

《アースクエイク》

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

大地が鳴動し、《ゴギガ・ガガギゴ》の巨体を揺さぶらし、跪かせる。しかし、その守備力は2800と非常に強固だ。

……言うな。読者諸兄は「何でこんな汎用性の低いカード入れてんの？」とか言いたいんだろ？分かってる分かってる。オレだっと思うさ。

だが、チートドローとはそんなもんだろ？あらゆるご都合主義を理不尽にも押し通してくるからな。

「……どうして《アースクエイク》を？《ゴギガ・ガガギゴ》の守備力は2800もあるのよ？」

「いや、違うな。2800“しかない”んだ。勿論、本命は別にある。」

その刹那、ふわり、とオレの足元に佇んでいたリバーズカードが、持ち上がる。

「伏せていた永続罨《竜の逆鱗》発動！」

《竜の逆鱗》

永続罨

自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「このカードの効果は知ってるな？オレのフィールド上のドラゴン族モンスターに、貫通効果を与える永続罨さ。」

「っその為に《ゴギガ・ガガギゴ》を守備表示に……！」

「
エリア！」

「！？」

突然叫んだオレに、エリアは当惑の色を見せる。「な、なに……？」
と戸惑いながらも控えめに返してくれる健気さがまたイイ。……っ
て待て待て、オレが今言いたいのはそうじゃないだろう。

スウと肺に目一杯息を吸い込んで、それと同じくらい、思い切り息
を声に乗せて吐き出した。

「このターンで、オレはお前に勝つ！」

「……！」

エリアが驚愕し、周囲のギャラリーも響動めきはじめる。そりゃあ
そうだろうな。この状況で同じこと言われたら、オレだって同じ反

応するだろうさ。無理だ、って言うだろうな。

「無理、よ……。私の残りのライフの3100ポイントを削るなんて……！《ゴギガ・ガギゴ》もいるのに……。貫通効果を使うとしても、攻撃力は5900も必要なのよ……！？」

「無理だと思うなら、その目にしかと焼き付けろ！このオレの勇姿を！」

オレは《ミンゲイドラゴン》をリリースし

リリースされた《ミンゲイドラゴン》がマーブル模様の虹色の球体へと姿を変え、屋気楼のように輪郭を薄めて消える。このマーブル球、遊戯王ゴッツのエフェクトだな。

しかし生憎だが、アドバンス召喚するモンスターは、一昔前の世代のモンスターなんだよな。

「《クリアー・バイス・ドラゴン》をアドバンス召喚！」

たゆたう球体が、空気が送り込まれる風船のように膨張し、孵化するように破裂した。

その内部から姿を顕したのは、巨大な水晶だった。……いや、透明な水晶に閉じ込められた、漆黒の翼竜だった。

「なに……、このモンスターは……。」

「《クリアー・バイス・ドラゴン》で、《ゴギガ・ガガギゴ》に攻撃！
クリーン・マリシャス・ストリーム……！」

《クリアー・バイス・ドラゴン》が攻撃を仕掛けんとするその瞬間、その巨体を覆う水晶が、《ゴギガ・ガガギゴ》の姿が何重にも映し出す。

水晶に映った虚像が《クリアー・バイス・ドラゴン》へと吸い込まれていくと、竜の姿はうねりうねって渦を巻いて

《ゴギガ・ガガギゴ》へと変貌した。

「……？」

「《クリアー・バイス・ドラゴン》の攻撃力は、攻撃対象モンスターの攻撃力の2倍になる！」

《クリアー・バイス・ドラゴン》
効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻 ? / 守 0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードのコントローラーに「クリアー・ワールド」の効果は適用されない。

このカードが相手モンスターに攻撃する場合、ダメージ計算時のみこのカードの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の倍になる。
このカードが相手のカードの効果によって破壊される場合、代わりに自分の手札を1枚捨てる事ができる。

「よって《クリアー・バイス・ドラゴン》の攻撃力は《ゴギガ・ガギゴ》の攻撃力2950の2倍、5900となる！」

「そんな……、まさか本当に……。」

《ゴギガ・ガガギゴ》の姿となった《クリアー・バイス・ドラゴン》の開かれた顎から、水色の炎が吐き出されて床一面を舐めるように浸食していく。

激情の灼熱は床を焦がすだけでは飽きたらないかのように《ゴギガ・ガガギゴ》を呑み込み、火柱を上げ、熱殺する。

「きゃああああっ!!」

エリア LP31000

エリアのライフポイントが0を示した今、このデュエルに、終止符が打たれた。

「あーあ、負けちゃったわ。やっぱり、『勇者様』は違うわね。」

いや、ぶつちやけ肉体的にも精神的にもギリギリだったんだが。正直、めちゃくちゃサレンダーしたかったっての。

てかエリア。お前最初に手加減するとか釘さしておいて、オレに手加減させる余裕すら与えなかったよな。

「ふむ、我が直属のエリアを打ち負かすとはな。『勇者』の名に恥じぬ、天晴れな戦いぶりであつたぞ。」

「お主が誠の『勇者』である事は、今ここに、その力をもって証明されたであろつ。」

そりゃどーも。王様にも神官にも周りのモブに讃えられたって、嬉しくもなんともないんだがな。

さて、と。ようやくオレも信用されたみたいだし、これで安心して自由に動け」では『勇者』よ。早速で悪いのだが、汝の力を見込んで、ご助力を要請したい。」

……はい？

第6頁 逆巻くエリア（後書き）

……え、と。グダグダですね。展開が色々と強引ですねコレ。でも、エリアのデッキは個人的に気に入っているので、また出したいです。

次回も『異世界黙示録』と『ぱいにん』をよろしくお願いします。

それとオマケに、

鉄壁ライフにするのって難しい……！

第7頁 決戦の火蓋（前書き）

デュエル無いのに、今回は少し長いです。色々と説明ばかりですから。

あと、台詞と地の文の間の行数を二行にしてみました。……どうでもいいですね。

第7頁 決戦の火蓋

オレは未だに『玉座の間』にとどまっていた。本心としては、さっきのデュエルでくたくたになった体の体力を回復したいから、今すぐベッドにダイブしたいんだよ。

だが、玉座に鎮座してオレに対峙するこのエンディミオン王が、それを阻むのだ。頼む、オレを、オレの安眠を、ささやかな幸せを、邪魔しないでくれお願いします。

とは思いつつも、人には優しく。をモットーとするオレには、このエンディミオン王を邪険にする事などできないわけで。……モットー以前に、そんな今の緊迫した雰囲気ブレイクするような場違いな台詞を吐露する度胸はオレには無いわけで。

だが、これだけは言っておく。オレは断固としてチキンでも臆病者でもない。ただ空気が読めすぎるだけなんだよ。

「さて『勇者』よ、汝はこの世界についてどれほど知っておる？」

というわけで、こうしてオレは《大神官デ・ザード》と《憑依装着 エリア》と数十人の《魔導戦士 ブレイカー》を交えて、エンディミオン王と対話している、というわけだ。ちなみに《執念深き

老魔術師』の婆さんは、新しい家を探しに市街地へと出た。

「そうだな……。この世界がオレのいた世界と違う事と、悪の軍団『イモータル』によって世界が混沌と化している事、ぐらいだな。」

それと、エンデイミオン王が人使いの荒いトンチキ野郎な事もな。エリアがエンデイミオン王は寛容だと言ったのは事実だが、この人使いの荒さは如何なもの

「そう申すな。最早我々に『イモータル』と全面から戦うほどの軍事力は無いのだ。民の生活と安寧は辛うじて保ててはいるが、それもいつまで続くかは分からん。」

って、だから人の心を読むっての！プライバシーの保護を訴えるぞオレは！理不尽すぎるだろ！

ま、まあとにかくだ。コホンとわざとらしく咳払いをして、話を仕切り直す。

「まだオレもこの世界に来てから日も浅いからさ。この世界の情報なんてほとんど知らないんだよ。」

この、左腕のヤツもな。

オレの左腕で鈍く黒光りするデュエルディスクを頭上に掲げて、灯りに照らし出されるそれをしげしげと眺める。この世界に来た時、いつの間にか装着されてたんだよな。

「汝が左腕に携えるそれは、かの先代の『勇者』も身に付けておったそうだ。」

「『勇者』は全ての魔物を軍勢として纏め上げ、己の配下として付き従え、ともに6体の『邪神』を封印した、というのが伝説となっておる。」

つまり、このデュエルディスクにモンスター達を懐柔させる力でも備わってる、って事なのか？確かに若干歪なデザインではあるが、特段変な装置が内蔵されてるようには見えないな。

「それってさ、オレのデッキの中身がデュエルの度にコロコロ変わるのとか関係あるのか？」

「「？」」

オレの質問に、エンディミオン王とデ・ザードは怪訝な顔付きと

なつてオレを見た。アレ、もしかしてオレ、なんか変な事言つたか？でも別に話の筋にそつてる（と思う。そう思いたい。）から飛躍しすぎた話でもないし。突飛で珍妙な事を喋つてるのは薄々自覚しているが。

ふむ、と唸つてエンディミオン王は考え込む素振りを作る。対してデ・ザードは猜疑心丸出しの眼差しでオレを凝視してくる。うぐ、こついう対応をされる事は薄々感づいてはいたが、マジでされたら精神的にキツイものが……。

「……汝の申す事の真偽の程は判じえぬ。だが、全く有り得ないという事は無い筈だ。先も言つたように、先代の『勇者』は数多の魔物を従えたのだ。ともすれば、かような事も絵空事ではあるまい。」

「ともに旅路を歩み、『勇者』に従事していた『エレメンタルマスター精霊術師』ならば、何か知っていたのかも知れないのだが……。」

「『精霊術師』？」

デ・ザードの呟いた台詞を、オレは聞き逃さなかった。『精霊術師』か、どつかで聞いた肩書きだが、どこで聞いたんだっけな。フアンタジーものの漫画とかアニメとかじゃなくて……。

「《精霊術師 ドリアード》。最優の術師として名を轟かせる、稀代の天才魔術師であつた。」

ああ、そうか。《精霊術師 ドリアード》か。現実だと汎用性の低さから採用率は劣悪そのものなんだが、イラストがなかなか秀逸なものだつたな。

て、今思い出したが、ここつて遊戯王の異世界なんだから登場人物名はみんな遊戯王から来てるに決まつてるよな。

「先代の『勇者』に付き従い、共に世界を渡り歩き、『邪神』を封印の呪によつて大地に封印した。だが、その際に己が命を捧げて『邪神』を封印したが故に、既にこの世にはおらぬのだ。」

神妙な雰囲気で、エンデイミオン王は感情を押し殺したような声で語る。そりゃあ優秀な魔術師だったらいいし、死んだのは惜しいだろうな。

……己の命を捧げて、か。死んだ『精霊術師』といい、行方不明になつた『勇者』といい、最後の戦いでいったい何があつたつてんだ？

「……それは分からぬ。だが確かに『邪神』は封印され、『勇者』は何処かへと行方を眩ました。そして『精霊術師』は己が命を絶つ

た。それだけは、確かな事だ。」

「そして、彼らが命を賭して封印した、かの『邪神』を『イモータル』が蘇らせ、その力で再び世界を死の世界にせんと企んでおる。」

「『精霊術師』が封印した『邪神』を、『イモータル』が解くなんて事ができるのか？」

「うむ、まことに遺憾だな。『邪神』は“杭”によつて大地に縛り付けておる。ゆえに、“杭”を外されては『邪神』が解き放たれるは必定であろう。」

「杭？そんなんで『邪神』は封じられるものなのか？」

「海瀬くん、エンディミオン王が仰っている“杭”というのは、あくまでも言葉のあやよ。通称、と言つてもいいわね。」

「杭というのは、平たく言えば“祭壇”の事だ。この世界の各地に建造され、それによつて『邪神』を封印しておるのだ。」

「……いや、分かつてたぞ？もちろん。“杭”が“祭壇”の事だつてくらいはな？だってホラ、ホントに“杭”なんかで『邪神』とやらが封印できるわけ無いだろ？……本当だぞ？」

「……とにかく、だ。今『邪神』はその……、“祭壇”で封印されてるんだけど、『イモータル』がその封印を解こうとしている。で、オレにその『イモータル』と戦って、封印が解かれるのを防いでほしいと。」

「うむ。我々は王であるが故に、この《魔法都市 エンディミオン》の秩序と平穏を護る義務がある。我々がこの場を離れれば、《魔法都市 エンディミオン》は傾く。」

「それに、先も言ったが私達には既に『イモータル』と戦えるだけの軍事力が無い。だからこそ、『勇者』たるお主に、世界の平和を託したい。」

そういえば、そんな事も言ってたな。それなら『勇者』といえど、昨日この世界にやってきたばかりの見ず知らずな異世界の人間のオレにも頭を下げるのは納得がいく。それほど人員が枯渇してるんだろっしな。

だが1つだけ、気になる事がある。

「この世界には他にも国があったりするんだろ？なら、その国々からも戦うヤツが出てきてたりするのかな？」

エンディミオン王やデ・ザード達の話聞く限り、この世界にはオレのいた世界のように色々な国がある事は容易に想像できる。だが、それらの国からも『イモータル』を打ち倒さんとするヤツが現れているんだろうか。

しかし、エンディミオン王の反応は芳しいものではなかった。むう、と唸って額に手を当てている。マスクで顔は隠れて見えないが、今エンディミオン王は物凄く苦々しい顔をしてるだろうな。

「他の国々は皆『イモータル』によって支配された、若しくは『イモータル』に抗う力と意志を失った国となってしまった。他国からの増援は、まず望めぬだろう。」

つまり、オレは1人孤独に『イモータル』と全面抗争しないと行けないってわけか。……やれやれ、現実は厳しいな。

「何も知らぬ異世界人に請うのは、不躰だとも思っておる。だが、今は汝に頼る他ないのだ。」

我々に、汝の力を貸してほしい。」

玉座に腰掛けたまま、エンディミオン王がオレに頭を下げた。瞬間、弾けたように周囲からざわめきとどよめきが走る。ざわ……ざわ……、って、それは違うか。

エンディミオン王の突然の行動には、流石にオレも面食らった。まさか、そこまですると思わなかったからな。

……どうするか。オレ1人だけで『イモータル』と戦うのは、圧倒的に不利なのは明白だ。オレも命は惜しいし、できれば即刻お断りしたい。そもそも『勇者』なんてのは、オレには過ぎた役回りだしな。

だが、オレが断ったら、この世界はどうなる？戦う術を持たないまま『イモータル』の蹂躞を受けて、あっという間に死の世界になる事は火を見るより明らかだ。エンディミオン王も、己の威信も全てかなぐり捨てて、オレなんかに頭を下げてるんだ。

自分の世界じゃないからって、自分には関係ないからって、困っている誰かを見捨てていい理由にはならないだろ？

「お待ちください！」

突如、オレの背後から凜とした声が鋭さをもって放たれ、『玉座の間』に響き渡る。何事かと振り返ると、そこにはエリアが肩を震わせて立っていた。その表情に、憤慨の色が見え隠れさせて。

エリアが数歩エンディミオン王の元へと歩み寄る。突然のエリアの憤りを伴った行動に、オレは勿論エンディミオン王やデ・ザード、果てには周囲の《魔導戦士 ブレイカー》ですらも当惑している。

「彼は、海瀬くんは、まだこの世界の事も、『イモータル』の事もほとんど知りません！『勇者』とはいえ、その彼1人に『イモータル』と戦わせるのは危険です！」

感情の突き動かすままに、エリアがエンディミオン王へと食ってかかる。対するエンディミオン王と言えば、嘆息を1つ吐き、苦々しく語るだけである。

「エリアよ、それは我も重々承知しておる。だが、時は一刻の猶予も無い。戦う術を既に失った我々では、最早『イモータル』とは戦えぬ。誰かが戦わねば、世界は瞬く間に滅びてしまうのだ。」

「それは、そう、ですが……！」

言い淀んで、エリアは奥歯を噛み締める。エリアも、理屈では分

かっているのだろう。もう時間が無いと。手段は選べないと。

その理屈に抗おうと、エリアの感情が衝動的に爆発したのだ。感情による抵抗に、意味が無いのを分かっている。

「……………エリア。」

「！……………海瀬、くん？」

エリアは、婆さんの恩人たるオレが異世界に1人放り出されるのを、拒んでくれている。『勇者』で、世界を救う鍵かもしれないオレを。オレの身を案じて、守ろうとしてくれている。

「別にいいんだよ、オレは。『勇者』って言われてるからだとか、そんなんじゃないよ。」

ただ単純に、どんなヤツでも、知らないヤツでも、困っているヤツを放っておけないんだよ、オレは。」

「それ、は……………。あなたが『イモータル』の恐ろしさを知らないから……………」

ああそつだな。ほとんど知らないな。悪魔やアンデットが大多数を占めた悪の組織で、世界を破滅させようとしてるぐらいしか知らないな。……でもな。

「オレがやらなかったら誰かが不幸になるなら。オレの力で誰かが救われるなら。その誰かのために戦おうとするのが、そんなに咎められる事なのか？」

「つでも……。」

「ただ無謀なだけだろうけどな、困ってる誰かを見て見ぬフリするなんて器用な事、オレにはできないんだよ。」

「……。」

エリアはそれ以上、何も言わなかった。その沈黙が何を意味するのか、オレは分からない。沈黙で承諾の意を示してくれているのか、それともただ馬鹿なオレに呆れているだけなのか。

ただ、その瞳は、不安げに揺れている。ぐさりと来るものがあるが、今はそれを尻目にするしかない。許せ。

再びオレがエンディミオン王へと振り返ると、エンディミオン王

は頃合いだと判断したのか、再び会話の口火を切る。

「……して、『勇者』よ。汝は我々に力を貸すのか？貸さぬのか？」

訊かずとも、答えは分かりきっている。それを敢えて訊いたのは、オレの意志を固めるためだろう。口約でも、契約は契約だからな。

無論、オレは約束は破らないし、口約であろうと契約も反故にしない。二の足を踏まずに、即座に答えた。

「当然、前者さ。」

オレの答えに満足したのか、エンディミオン王はフツと笑みを漏らす。相変わらず表情はマスクで隠れちまってるけどな。

「『勇者』よ、汝の協力に感謝する。……さて、エリアよ。」

エンディミオン王が突然、エリアへとその意識を向ける。前触れもなくいきなり自分が呼ばれた事に面食らったのか、エリアの顔が勢いよくあげられる。

驚いた拍子に目が見開くが、すぐに細まってエンディミオン王が

ら視線を逸らす。いや、そつぽを向いたという表現の方が正しいか。

「……なんでしょうか。」

「この男が1人で旅立つ事が、未だに不満か？」

「！……………いけません、か。」

今度は頬を膨らませて、表情はむくれたものとなる。ぐ、可愛い。不謹慎だけど。

口を尖らせ、そつぽを向くエリアは、間違いなく拗ねている。自分の主張が突っぱねられたのだから、むくれるのも当然か。可愛い、やはりかわいいそんな気がする。オレもエリアの好意を無駄にしちまったわけだし、罪悪感がある。

しかし、誰かがやらないといけないんだって。仕方ないんだって。だからさ、エリアはここでオレの帰りを待つ

「ならば、『勇者』とともに旅路に出てもらいたい。」

「……………え!?!」

オレとエリアは、同時に叫んでいた。え、エンディミオン王は何て言った? 何でエリアを? ホワイ?

予期せぬエンディミオン王の勅命にはエリアも相当困惑しているようで、あわあわとたじろいでしまっている。

「エンディミオン王、そ、それはいったいどういう意味ですか……!?!」

「ふむ、それについては先に話す事がある。実を言つとだな。『勇者』にもう1つ、頼みたい事があるのだが。」

え、オレツスか。しかももう1つ頼みたい事って何。『イモータル』と全面抗争するオレにまだ何かやらせるつもりなのか? 労働基準法違反するんじゃない? この世界にそんなのあるか知らないけどさ。

「汝に“杭”、つまり“祭壇”の話はしたであろつ。先にも言つたように、あれは『邪神』を封印する枷。それを『イモータル』に打ち碎かれるわけにはゆかぬ。」

そこでエンディミオン王は1つ息を吐いて呼吸を整える。と同時に、にわかに緊迫した空気が張り詰める。

するとそれを合図にしたかのように、デ・ザードがオレの元へと近付いてくる。その手元には《封印の黄金櫃》のようなものが収まっており、オレの前までくるとそれを献上するとばかりにオレの胸元へと差し出した。

何だこれ、と至極当然な疑念を抱くと、デ・ザードの差し出すそれを受け取り、蓋を取り払う。

中を覗き込むと、原作やアニメよろしくカードが収まっている。ただ収まっている枚数が6枚もある事と、そのカードの種類が違う、などの差違はあるが。

取り出したカード達をしげしげと眺めてみる。といっても、中のカードは全部同じだったから一番上に来たカードを見るだけだ。

カード、とは銘打つても、やはり違いはある。カード名も効果も書いてないし、その周囲の枠すらない。あるのは魔法カード共通の緑色と、見覚えのあるイラストとその枠だけだった。イラストを見た事があるから、名前は分かる。

「《フィールドバリア》？」

「ほう、お主の世界では、そのように呼ぶのか。」

まあな。少なくともこんなヘンテコなカードにはなっていない。
イラストは勿論、カード名もテキストもあるし……………ってデ・ザ
ード、顔近い。暑苦しい。

「それは私が魔術師が心血を注いで作り出した技巧の粹。その効力は保証する。」

「それを“祭壇”へと捧げる事により周囲一帯に結界を発現、構築し、外界よりの干渉を遮断する事ができるのだ。」

まさに《フィールドバリア》というべき性能だな。とはいえあれには色々と弱点はあったが、こつちの世界じゃ抜群みたいだな。OCGで言えばフィールド魔法のみならず、魔法・罫やモンスターも護れるようになれるって感じだな。

「汝にはそれを“祭壇”へと安置し、『イモータル』の襲撃から“祭壇”と周囲の領域を護ってほしい。だが、“祭壇”の正確な位置は我々でさえ把握できておらぬ。故に、汝には要らぬ手間を掛ける事となる。」

なるほど、『イモータル』との抗争以外にどんな無理難題を押し付けられるかと思っただが、ただ安置するだけなら何とか兼任できるか。しかし、場所が分からないのは厄介だな。

「だが、汝の旅路の要所、つまり汝が巡り辿り着く領域の中の何処かに、“祭壇”がある事だけは分かっておる。」

ああ、旅路の中途にあるんだったら、その領域の中を散策して、見つけた時にでも行けばいいだろうな。言い方は悪いが、本命やりながら片手間にできるわけだ。にしても、だ。

「それと、私が海瀬く……、彼とともに旅に出ろ、とはいっただい……？」

「ふむ、実を言えばな。その“祭壇”にカードを安置する中心部があるのだが、そこには『精霊術師』の張った《光の護封陣》が、かの亡き後も残されておるといふ。」

「『精霊術師』の死後も効果が持続するように、彼女は最小限の範囲で最大限の防御力と持久力を持つ《光の護封陣》を遺したのだ。それも、術式の異なる、6つの結界を1つずつ、な。」

外部からの介入を拒む《光の護封陣》とは、《精霊術師 ドリア

ード》も随分と厄介な代物を遺したもんだな。まあ、中心部を破壊されたらたまったもんじゃないのは分かるけどさ。

「術式を同じくする者でなければ、かの護封陣は破れぬ。無論、かの『勇者』といえどな。故に、『精霊術師』と同じく6つの系統を操る汝ら『霊使い』に、それを一任したいのだ。」

という事は、エリアなら同じ水属性の護封陣に入れるわけか。しかし、外壁が破壊されてもアウトだから内部から防御を固めようとしたら侵入に条件付きとは、割に合わないなホント。

あれ？でも待てよ？《精霊術師 ドリアード》は5つしか属性が無かったはずだ。闇はどうしたんだ？

「！汝、なぜ《精霊術師 ドリアード》が闇属性しか持たなかった事を？」

まあ、色々とな。そこはオレのいた世界が関わってくるからトゥプシークレットでな。で、どうしたんだ？

「聞くところによれば、『幻惑の巻物』というもので、闇の魔法を一時的ながらも操ったらしい。」

……ああ、なるほど。光属性は犠牲になるから、前もって光属性の護封陣を張った後に、闇属性の護封陣を張ったわけか。

そういえば今思ったが、この世界の《光の護封陣》って種族じゃなくて属性で縛るのか。……それって強くな？こつちの世界じゃデユエル以外のカードとかは効能が違うのは分かっちゃいたが。

気付けば、エンディミオン王の視線がいつの間にかオレから逸らされ、オレの隣に立つエリアへと向けられていた。

「やってくれるか？エリアよ。」

「……。」

再び、一同とともに空気がシン、と静まり返る。そしてこの場の全員の目は、問い質すエンディミオン王と、沈黙するエリアを言ったりきたりしている。

「……私、は。」

ポツリ、とエリアは短くで呟くと、その膝を折った。そのまま床に屈み込み、頭を下げる。

「……魔道士エリア。僭越ながらその役目、喜んで務めさせていただきます。」

その瞬間、オレの胸中で喝采が湧き上がる。エリアが、オレに付いてきてくれるのだ。精神が高揚しすぎて、思わず小躍りしたくなるような衝動にさえ駆られてしまう。が、そこは自重。

エンディミオン王もエリアの返答には大変満足したらしい。うむ、と頷いた時のエンディミオン王の雰囲気、エラく朗らかだったからだ。

「エリアよ。汝の忠誠に感謝するぞ。」

「勿体なきお言葉です。」

エリアが更に一段と恭しく頭を下げると、反対にエンディミオン王はゆるゆると立ち上がり、その視線をエリアから外し、またもオレを射抜く。

「『勇者』よ。日も既に沈みかけておる。今夜は街の宿に泊まるといいだろう。デ・ザードよ。宿の手筈を頼む。」

「心得ました。」

「では、汝らは下がってよいぞ。」

「はい。失礼いたします。」

おお、宿の手配をしてくれるとは気が利くな。わざわざ街まで戻らないといけないといけないのは面倒だが、まあ贅沢は言っていない。

オレ達は一礼して、エンディミオン王の元を後にする。宿の居場所が分かぬであろう、というエンディミオン王の配慮のもと、エリアがオレを宿まで案内してくれるらしい。何から何まで至れり尽くせりだな。

その後、再びエレベーターに乗ったオレは、猛烈な吐き気に苦しんだのは言うまでもない。

「
そおりやあつ！」

掛け声とともに、オレの体がルパンダイブの要領で宙を舞う。流石に本家のように服は脱がないけどな。

そしてダイブするオレの着地点には、純白のシートが待ち構えており、飛び込むオレの体を埋まらせる事で優しく受け止める。

ギリギリ、と飛び込んだ際の重みと衝撃に悲鳴をあげるように、スプリングが軋む。だが、そんな不安感を煽るような歪な音も、オレを包み込むこの柔らかな感触が、そんなものは容易く突っぱねる。

「やっぱり街のベッドは最高だぜー。」

この感触は《魔法族の里》のベッドでは味わえなかったからな。

多分、明日からも。なら、今の内に噛み締めておかないとな。

ダイブした後のままの体勢、つまり俯せの状態から仰向けの体勢へとシフトしようとベッドの上でゴロリと寝転がる。が、その際に左腕に装着したデュエルディスクが邪魔となつて、反転する事は叶わなかった。

顔だけを上げた俯せの体勢のまま、左腕を眼前に出してデュエルディスクの装着部たる腕部の金具を弄ってみる。どうやって外すのか分かったので、テキトーに弄ってみて。お、案外簡単に外れたな。

外したデュエルディスクをベッド付近に置いてあつた小机の端に置く。ゴトリ、という拳銃を置くような重い音が、改めてこのデュエルディスクの重量感を如実に物語っている。

これでようやく仰向けになれる、と寝転がると、もう一度デュエルディスクに。厳密には差し込まれているデッキに。目がいった。

「……。」

何とはなしに、仰向けの姿勢のままデッキを抜き去り、扇状に広げてみる。そこにはバニラ色も、緑色も、紫色も、茶色（人によつ

ては橙色か?)のカードも無い。

白色。本当に何も描かれていない、端から端まで真っ白なカードばかりだった。扇状から再び一纏めに戻し、一枚一枚横にスライドさせて確認してみる。が、やはり現実是不変わらず、純然たる白色だけがそこにあった。

……目を疑ったさ。オレはいつからデュエルに負けた十代になっちまったのかと半ば錯乱すらしたさ。そりゃ昔から負けは何度か味わったが、こんな事は今まで一切起きなかった。

やっぱ、この世界特有の奇々怪々な現象とか、デッキの中身がコロコロ変わるのとかと関係があるのか?だがしかし、いや、えーと……。

「……………やめだやめ。」

エンディミオン王も知らなかったのに、ポツと出の異世界人たるオレが知るわけも無いんだ。デュエル自体には支障は無いみたいだし、取り敢えずこの問題は保留しよう。

デッキを小机の上に置き、全体重をベッドに沈み込ませる。……あー眠い。虚脱感と脱力感のダブルパンチの威力がハンパじゃない。疲労の波が弱ったオレに付け込んで一拳に押し寄せてきやがった。卑怯者、武人の上風にも置けぬヤツめ。

だが、もはや抵抗する気力すらないオレには、このまま爆睡への泥中に沈むしか無い。ゆっくりと瞼が降り、意識を明後日の方向にかつ飛ばしておやすみなさい。

コンコン

オレの眠気を妨げて、オレの部屋を控えめにノックする音が響く。おいおい、他人の安眠と変身を妨害するのはマナー違反なんだぞ。

「……ルームサービスの方ですかー？」

とか何とか思いつつも、受け答えしてしまうのは何で何だろうな。あれか、断れない日本人、俗に言うイエスマンってやつか。

「海瀬くん、ちょっといい？」

オレの体に電流走る。こ、このドア越しからも分かる凜とした美しい声色は、エリアか！？い、いや、落ち着け。K O O Lだ、K O O Lになれ海瀬総一！

「え、エリアか。何だ？」

あ、ヤベ。声もつた。変に思われたんじゃないだろーか。しかし、エリアは特に気にならなかったようで、そのまま言葉を継ぐ。

「そのままでもいいから、聞いて。」

いや、オレ今ビックリした拍子で相当お間抜けな格好してるんだが。オレの状況を知らないから無自覚なんだろうが、この情けないポーズのまま話を聞けというのは残酷じゃございませんかエリアさん。ちなみにどんなポーズからは想像に任せる。それで概ね合ってるだろうし。

「こんな夜遅くに訪ねるのは悪いって分かってるわ。海瀬くんも疲れてるだろうし。……でも、もう一度訊いておきたかったから。」

「もう一度？」

「海瀬くん……、本当にいいの？もしかしたら、あなたは『イモ』

タル』との戦いで死ぬかもしれないのよ？それなのに、エンディミオン王の命令を受諾して。」

「……………」

「後悔したり、してない？もし嫌なら、私がエンディミオン王に掛け合ってみて……。『イモータル』との戦争も、私たちが軍備を整えて……………」

「……………」

「やっぱり、エリアはまだ心配してくれてたんだな。エリアは優しいから、異世界人のオレの身を案じてくれたり、自分たちで背負い込もうとするんだろうな。」

「そういうエリアだってさ、エンディミオン王の命令で、各地の“祭壇”を巡ろうとしてるだろ？お前こそ、命を落とす可能性だって十分にある。それに、女の子1人での旅なんざ危険すぎるだろ？」

「私は、エンディミオン王の直属の部下だから命令に背くわけにはいかないわ。それに、これは私たちの問題だから、異世界人のあなたを巻き込みたくないの。」

「……エリア、その気持ちは確かに嬉しい。 だがな。」

ふと、上を見上げる。が、その視線が捉えるのは、部屋の天井じやあない。幻視しているものは、オレの遠い昔の記憶だ。

「オレの決意は、変わらない。困ってる誰かを助ける。そうする事が、オレのあるべき姿だとオレは思ってる。」

「それは……『勇者』として？」

「いや、『勇者』も何も関係ない。オレという存在自体が、そうなんだ。というより、そうでありたい。」

我ながら、ここに来てからクサイ台詞ばかり吐いてる気がするな。本物のヒーローでも気取ってるつもりなのかっての。

ドア越しの両者の間に、静寂が降りる。それからしばらくして、エリアが嘆息とともに言葉を紡ぐ。

「……そう、分かったわ。ごめんね、野暮な事訊いたりして。」

「いや、オレの方こそ悪かったな。勝手な事ばかり言っただけ。」

「ふふ、いいのよ気にしなくて。じゃあ、おやすみなさい。私は隣の部屋で寝るから、何かあったら呼んでね？」

「ああ、おやすみ。」

オレが最後に挨拶を返すと、ドアの向こうで足音が遠ざかり、直ぐ隣の部屋のドアが開かれ、そして閉まる音へと変わる。ホントに隣の部屋なんだな。

何かあったら呼んでね、と言われてもなあ。その何かの有る無しに関わらず、就寝中の女の子を起こすなんて暴挙、誰ができるんだ？できるならその行動理念と神経の図太さに拍手を送りたい。

ただでさえ色々世話になったり迷惑かけたりして引け目感じまくってんのに、そんな事オレにできようものか。引け目感じる事がなくても、だ。こらそこ、チキンじゃない。ジェントルマンと呼べ。

再びベッドへとフライングプレスをかまし、華麗に落着する。そのまま全神経と意識をベッドと睡魔に委ねれば、いとも容易く、オレは眠りに落ちた。

結局、翌朝までエリアを起こすという暴挙をする事もないまま、オレは爽やかな朝を迎えた。朝日が眩しい。これが《シャインスパーク》の威力なのか。

ベッドから起き、顔を洗い、歯を入念に磨き（アメニティは全部ムダに使い切るのが、オレのジャスティス。）、宿から借りた寝間着を脱ぎ捨て（ちゃんと後で畳んだぞ。）、洗濯を済ましてもらった制服をラフに着て（こっちの世界に来る前が下校中だったから仕方ない。）、ルームサービスで朝食を済ませる。

最後に、小机の上に置いてあったデュエルディスクを装着し、デツキを挿入する。再び左腕にズシリと重みが掛かるが仕方ない。付け心地を確かめて、部屋を出る。

フロントに行く前に、隣の部屋をひょっこり覗いてみた。あわよ

くばエリアのパジャマ姿を拝めるかと思ったが、いたのは掃除のおばちゃん代わりであろう《白兵戦型お手伝いロボ》だけだった。期待を裏切られた喪失感がハンパじゃない。絶望した。世界の全てに絶望した。

そのまま一気に重くなった足取りでフロントに向かう。すると、オレを待っていたのか、ホールのソファーにエリアが腰掛けていた。

「おはよう。昨日は眠れた？」

歩み寄るオレに気付いて、振り返りざまに微笑みかけてエリアが声をかけてきた。ぐは、ヤバい。色々と。

「お、おう、おはよう。まあ、疲れてたしな、不謹慎なほど爆睡してた。」

「ふふつ。海瀬くん、疲れてたからしょうがないわよ。さ、行きましょ。もうチェックアウトは済ませてあるわ。」

エリアがソファーから立ち上がり、その横に置いてあった背嚢を手にとった。

「何だそれ？」

「旅に必要なと思った生活用品よ。食料とかテントとか、まあ色々ね。一応、海瀬くんが起きる前に買い集めておいたの。」

なんと、じゃあエリアはオレより相当早く起きていたわけか。背囊自体はそこまで大きくないから、大した量じゃないだろう。だが、少なくとも一時間以上はオレより早かっただろう。

何となくこつぱずかしくなって、背囊を背負おうとするエリアより先に、それを半ば強引に取ってオレが背負う。……軽い。おそらくエリアの力でも背負える程度の量にしておいたであろう事は、容易に想像できた。

「？」

「荷物ぐらいなら、オレが持つさ。そのために男ってのは女より力があるんだからよ。」

ホントは何で男が女より力が強いのかは知らないがな。骨格の違い云々なんだろうが、じゃあ何で違うんだ。……という循環論証はさておき、力仕事ぐらいしかオレの役目はないからな。ただのカツコつけかもしれないが。

「……そう？じゃあ、お願いするわ。」

突然のオレの行動に面食らって固まっていたエリアの表情が、フツと弛んだ。こ、これは是非カメラに収めたい。それだけでご飯3杯はいける。

水色の髪を靡かせて宿を後にするエリアとともに、出入り口の扉へと歩を進める。……にしても、こうして荷物背負ったり、色々支度とかしてもらったりしていると、どっちがどっちに追従してるか分からないな。

「……さて、まずどこから行く？」

「そうね……、行動指針としては各地の要所を巡って『イモータル』の支配から解放して、その要所に“祭壇”があれば《フィールドバリア》を構築する、というのだから、手近な場所から虱潰しに巡った方が良いかしら？」

「じゃあ、この近辺から最も近いのは何処なんだ？」

「ええつと……、先ずは《山》を登って、その山腹にある《エレキヤッスル》が近いかしら。」

手にした地図の一角を指差して、それをオレに寄越して見せる。

《山》は《神聖なる森》にまた入って、そこから直ぐに登れるのか。

「それに、エンディミオン王が仰るには、もしかしたら各地の有力者たちも『勇者』には力を貸すかも、って。」

「へえ、そりゃ心強い。」

まあ、戦いたくても戦えない自分たちの代わりに『イモータル』と戦ってくれるヤツには、力を貸すかもな。そういうヤツが《エレキヤッスル》にいるかは分かんが、行ってみるか。

こうして、オレたちと『イモータル』の戦いの旅が、決戦の火蓋が今、切って落とされた。

オレたちの旅は、まだ始まったばかりだ！

第7頁 決戦の火蓋（後書き）

……はい、すみません。まだ完結はしません。

今回は説明ばかりだったので、色々と読みにくい所があるかもしれませんが。（いつもそうだろ。）

次回とも、『遊戯王 異世界黙示録』を何卒よろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0118/>

遊戯王 - 異世界黙示録 -

2010年10月15日17時19分発行